

京都迎賓館一般参観記念

—京の伝統的技能講演会—

京都迎賓館に生きる京の技と心

夜話 京都の技・業・waza

コーディネーター

株式会社日建設計理事・技師長

パネリスト

截金作家

大林組グループ大林ファシリティーズ株式会社大阪支店顧問

株式会社日建設計設計長

江里佐代子 氏
水本豊弘氏
三谷康彦氏

佐藤義信氏

●三谷　日建設計の三谷と申します。本来でございますと私はあちらのパネリストのほうに座る予定でございましたが、コーディネーターを務めます日建設計の建築のほうを担当いたしました佐藤が少し遅れておりまして、最初の京都迎賓館の概要のご説明をさせていただくことといたします。その前に簡単に私自身の自己紹介をさせていただきます。

私自身は、日建設計という建築・土木等の総合設計事務所に入りましたのが八年前でございまして、日建設計のなかにはランドスケープ設計室というところがございます。ランドスケープというのは景観のことですが、その設計室に所属しております。その前はアメリカの西海岸に七年間、東海岸に約九年間おりまして、三十代から四十代の半ばすぎあたりまで海外でランドスケープの仕事をしておりました。二十代の頃に

京都のこの地で庭の実際の現場の仕事を五年間、その前に設計のほうを五年間やっておりまして、三十すぎあたりにアメリカへまいりまして、再び五十ぐらいに日建設計に入つて以来、この迎賓館の仕事に関わらせていただいております。

京都に戻つてきてこういう大変な仕事をさせていただいて、因縁といいますか因果といいますか、そういうものを感じると同時に、日本の良さといいますか伝統的技能のすごさといいますか、そういうものをまた違う観点から感じている一人でございます。三谷でございます。

順番に自己紹介をお願いしてよろしいでしょうか。では、大林組の水本さん、お願ひいたします。

●水本

こんばんは。今回、工事の責任者をやらせていただきました元大林組の水本でございます。ちょうど私は二十数年前、京都の桂離宮の御殿の解体修理工事を六年間やらせていただきました、三年前には「プロジェクトX」でご紹介いただいたわけです。そういうような伝統技術を買われまして今回迎賓館の工事をやらせていただくことになりました。

実はこの現場に来たときはすでに六十歳でございまして、もう定年を過ぎていたので、もう終わりよとうことだったのでけれども、いざ図面を開けてみると、「これはえらいこっちゃ。この現場をやってから辞めてくれや」という話になつて、若い人の教育係も含めて、今回この迎賓館の工事を本当に最後の最後にやらせていただいて大変喜んでいます。

●江里

私は截金に携わらせていただいております江里佐代子でございます。このたびはこの迎賓館が見事に完成されました。多くの素晴らしい伝統の技術・技能が用いられております。たくさんある貴重な技術の

中から、今回のテーマの「技」というところで私が出させていただけては非常におこがましいことと思つておりますが、水本さん、三谷さんと同席させていただけたことを光榮に思つています。

截金と申しますのは金箔やプラチナ箔を使った仕事で、薄い箔に厚みをもたせて、細く切り、筆で貼りながら模様を描いていくというお仕事です。この技術は中国から朝鮮半島を経て仏教伝来と共に日本に伝わりました。主に仏像・仏画などに施されていた仕事です。私は仏師の家に嫁きました縁で、この技術を知り、同時に後継者が少ないために廃れかけている、この技術がなくなつては困るというお話を聞いておりました。何か家業のお手伝いができるいかと思っていたのと重なりまして、伝統截金の北村起詳師の手ほどきを受け、携わらせていただくようになりました。

職人として截金に携わらせていただいた私が今回ここに座させていただき、充分にお話ができるかどうか不安ですが、無から有を生み出すという技術の仕事をここでご紹介させていただけたらと思っております。

●三谷 ありがとうございました。それではいよいよ概要の説明をさせていただくわけでございますが、「京都の技・業・waza」というので漢字が二つとローマ字読みが一つございますけれども、思いといたしましては、いちばん最初の「技」の部分が工芸を代表される江里佐代子先生、二つ目の「業」は大ベテランの水本元統括所長、いちばん最後のローマ字がなぜか私でございます。ちょっととこじつけっぽいなという感じがいたしますが、早速映像でご説明申しあげます。

左側に御所がございまして、上が北でございます【写真67】。右側に白く抜けておりますあの部分が京都迎賓館。東西に百メートル、南北に二百メートルで、敷地全体が北から南に向かつて約一%の勾配がついております。これは左側が北で右側が南でございます。真ん中に庭ができるような形になつております。

の周りをほぼ取り囲む形で建物が建つと。一ヵ所抜けている部分がございまして、この部分と外周の御苑の緑が繋がっていくという構成です。

これは空からの写真です【写真1】。手前に見えます白い部分が石畳でございまして、前庭、いわゆる車まわしの部分でございまして、大きな庇が出ておりますが、この部分から施設の中に入るという構成になつております。

敷地の外周はかなりマツを主力とした御苑の緑が広がっているという状況であります。ちょうどこのあたりが車まわしからの入口で、ここに門が少し見えております。この部分に少し建物の切れ目がございまして、そこから庭園的には外周に繋がつていいという構成でござります。

今、誰か登場いたしましたね。日建設計の佐藤義信がまいりましたので交代いたします。

●佐藤 すみません。「わざわざ」お出でいただきまして、今日は「技・業・waza」でござります。すみません。遅れてまいりまして。三谷は自己紹介いたしましたか。ランドスケープです。「オレブリンナー」と先ほど名前をつけましたけれど。では話を続けさせていただきます。

これが正門から見た玄関の様子でござります【写真3】。屋根はニッケルとステンレスを組み合わせた、タンクの内装材として開発された大変タフな材料であります。京都迎賓館は百年以上の寿命を期待される施設として、いちばん建築のなかでタフといいますか長寿命が求められるのは屋根であります。ちょっと色がわかりにくいですけれども、まったくシールを使わない、そういう屋根を開発しました。ちなみに瓦棒という縦に下がっているものの中にはアルミの押し出し型材というのが入っておりまして、金属の形だけで雨の水を止めるという屋根でござります。

左に見えますのが正門です【写真4】。これも現代技術と伝統的技能の合体したもので、一本の柱だけで約七メートル×十一メートルの屋根を支えております。二本の柱の中には鉄が入っております。瓦も、実は阪神・淡路大震災のときに、瓦屋根が悪者になつてケガ人が多く出たとか死者が出たとかという報道に憤りを感じた時期がありまして、通常よりも六割の重さで、勾配も二寸五分ぐらいで水が止まるような現代瓦を開発して、実はこれが二度目なのですが、今回堀とか門で使わせていただいております。

こちらの庭はお客様をお迎えする場所で、最初に出会つていただく空間です。場合によつてはここで儀式をなさるかもしれないということで、京都御所へ行かれた方はお気づきでしようけれども、白川砂の「白砂平庭」というのがあります。あれのイメージのように非常にスクエアなどといいますか余計な要素がない庭にしております。一本だけこちらに見越しの松がありますが、それ以外はほとんど植物らしい植物もないような、そういう庭であります。

奥のこの扉は、京都迎賓館の玄関を通り抜けるのは、皆さん結婚式などにお出でになつたときもそうでしょうが、まずは開式の前に新郎新婦が並んでお客様を迎賓をなさる、送るときもキャンディーか何かをくれて「今日はどうもありがとうございました」とやるじゃないですか。あれが玄関でありまして、先斗町へ行きたい人もいるでしょうし、祇園へ行きたい人もいる。祇園へ行くと佐野さんに会うかもしれませんのが、そういう方々の脱走口がこちらの扉でございます。こちらからは、「どうぞ門限はないから適当にどこか行ってね」と、今日は夜話ですから少しやわらかい話をしながらいきたいと思います。

これが玄関です【写真5】。この扉は樹齢七百年の福井県産のケヤキです。だんだん記憶があやしくなりますが、そういう板です。もう一度と得がたい一枚板です。これを十六枚、手に入った材料を一センチ単位ぐらいで切つていきますと十六面取れて、実はこの玄関周りに全部使つてしまつたわけです。あとで内田祥

哉先生に聞いたら「あんな材料はもう二度と手に入らんぞ」といわれましたが、そういう木でござります。

床もケヤキです。ここはみな下足で歩きます。いまの皆さんと同じように靴の様子でここをお歩きになるわけです。「木の国日本」、「水の国日本」と、やはり「木の国日本」を表現したくて、こちらもケヤキの木材です。ただそのまま使うとやばいものですから、プラスチック含浸をして強度を上げて、最近は塗料が大変良くなつて超耐磨塗料というのがあるので、そういうことでやりました。ここはもう一千人ぐらい歩いていますのが傷なしということで、成功いたしました。

天井はスギです。このへんはだいたい吉野系です。今お座りの水本統括に大変ご迷惑というか大変ご心配をかけた天井がこのへんにあります。これが心配をかけた天井ですね。

これは玄関を通り抜けた回廊の様子です【写真6】。実はこの奥に、今日の屋間の講演でパネリストをやつていただいた喜多川儀二先生の装束が置いてあります。

壁は漆喰です。貝灰五十、石灰五十パー센ツの少しグレーの壁ですが、白い壁というのは日本人にとって「何もない」という「無」に通じるような、そういう精神性の壁だという思いで、真っ白にいたしました。かつて京都のまちが真っ白になつたことがあるのですよ。お米を使って白い壁をつくっていた時代があつて、それは超権力者でなければ使えなかつた。仏画を描いたりする下地のキャンバスだったわけですが、布海苔が壁に使えるようになつて、ちょうどお城をつくる頃はやたらと白くなつた。そのため京都のまちが白に埋めつくされた時期もあるという話をものの本で読んだことがあります。

このへんはむしろ三谷さんに説明してもらつたほうがいいのかもしれません、玄関が左側です。この奥が晩餐室ですが、そのコーナーから見た庭の様子です【写真7】。今回の庭の計画をするにあたつて、「木と水の国」という意味では、お客様に水に対する日本人の精神みたいなものをお伝えしたいという思いがあつ

て、いろいろな計画をしました。最初はここは白砂平庭だったのです。一時ここに陸地があつて、三谷さんはこのへんに灯籠を立てたりした時期もありました。私が「鬼の洗濯岩のようなものを石でつくつたらどうか」といった時期もありましたが、結果こういった非常に薄い水鏡の庭にいたしました。

この下には実は地下室がございまして、ここにはメインの機械室が埋もれています。そういったこともあります。非常に浅い庭なのですが、この池底に敷いてある砂利はすべてこの敷地の中から産出した砂利を、だいたい三万立米強の土を掘ったと思うのですが、その土を全部ふるつていただき取り出した砂利です。かつてこのへんは鴨川の氾濫原で、そういう場所だったわけですが、何千年か何万年か前の石が再びここで脚光を浴びてといいますか、役に立つて庭の景色をつくっているということです。

同じように、これはそれほど古くはございませんが、つい最近まで役に立っていた、人の暮らしを豊かにするために、三谷さん的にロマンチックにいうと、無名無心の石工が一生懸命つくった五条大橋の橋杭、そしてこちらが塩田の堰門の笠木というように、かつて仕事をしていた石でリタイアしたものをもう一度この庭園の中に取り込んで、そして景色にしていこうというのが三谷流の庭園に対する思想であります。そもそも日本の庭園というのはそうだったのかもしれません。

この奥には根引き草という常緑のイグサが植えてあります。ポットの中に植えてあるのですが、水の水平線に対して非常にしつかりした垂直性を表現して、全体として『古事記』の中出てくる「葦原の」みたいな、日本の陸地が生まれる前の原初の風景みたいなものを象徴的に表現できればということでこのような庭園になっています。一時は田んぼにしようという時期もありました。この庭はいちばん大きく変化した庭ですね。

こちらが玄関のすぐ脇にあります少人数でお待ちいただくためのロビーです【写真8】。この部屋には直

接外の光が入りませんので、意識的に闇をつくりました。家具なども非常に派手な色にしてあります。皆さんがご覧いただいているよりは若干品がいいかと思うのですが、こういった京の指物の技術と西陣織で、ちょっと間違うとチャイニーズという椅子で部屋ができるります。

こちらが大会議室という部屋です【写真9】。閨僚級の会議をするのが当初の目的であったわけですが、今の家具レイアウトがまさにそれで、中央がメイン会場、両側にこういったテーブルがあつて、両国の控室があります。そのときは本当はこの奥の壁がするすると動いてここまでくるのです。壁の向こう側に事務局がいて、このメイン会場で変なことをいふと、「ちょっとそんなことをいっちやまずいですよ」といってひよつと行つて肩を叩くことがあるのかなという部屋です。ここには同時通訳ブースがあります。

今はこの壁をめいっぱい壁際まで寄せて一部屋にしてあります。それは、晩餐会は最大百二十人ぐらいの会食を予定しているわけですが、迎賓館の中に百二十人近くの方々の専用ロビーをつくるのはお金もかかるし、面積的にもなかなか難しい。そうであればこの部屋をうまく使いまわそうということで、家具を替えて、照明の様子も替えて、晩餐会のときのプレファンクション会場として使っていこうと思つております。

この奥にはきれいな壁がありますが、これは日本画家の箱崎睦昌さんに下絵を描いていただきまして、それを龍村美術織物で綴れ織に、西陣のなかでは最も装飾的な織物ですが、それに置き換えたものです。つくり手と画家のあいだに森口邦彦先生に入つていただいて、織としてのクオリティーを上げることを行いました。やはりプロが入るとすごいです。

これは夜の風景です【写真68】。このように照明器具がホタルが空を飛んでいるような照明に変わります。これは一つのファイバーライトから出る光を三枚のガラスネットで受けて、光の輪ができるようにしてある

のです。一粒で三度おいしいという、そういう天井があります。このへんが切れているのは調整不足です。本当はついています。くるっと回って先ほどの庭ですね【写真10】。こういった様子になっていきます。

このように庭を渡り廊下で繋いでいるわけですが、「サリン事件が起きてから十年」というのが今よく報道されますね。私たちが設計を始めたのは九年前です。ということは、設計を始めたときはサリン事件から一年のときだったのです。この施設では大変に気密性を重視して、非常に鮮明にサリン事件の衝撃が残っていた時期に設計を始めたものですから、施設全体を大変エアータイトといいますか、気密性を上げようとうことが厳命としてありました。そのなかでやはり日本の建築というのは、庭園も含めて外の風とか気温とか音といつたものと一体となって体験していただきたいということがなかなかこういうお部屋の中ではかなわないなかで、こういう橋を架けて、ここをお渡りいただくながでそのときの外部の環境を直接に体で感じていただこうということと、妙に長い庭を区切ろうというのと、二つの意味でこのような橋を架けております。

これがいちばん奥にある、東側にある晚餐室です【写真11】。これは宮中式のレイアウトでこれで六十席ぐらいあるかと思いますが、百二十人ぐらいまでの会食が可能なお部屋です。奥の壁面は綴れ織です。日本画家の鹿見喜陌さんに下絵を描いていただいて、川島さんで織ったものです。いま十六メートルの機を持っているのは川島さんだけですから独壇場ですね。値引き交渉に苦労したと思いますけど、僕がやったか。

左側にあるのが江里さんになつていただいた截金です。これは実は舞台の扉ですが、木曽檜という、妖精が宿るような美しい木の上に妖精そのもののような截金を江里さんに施していただいたものです。赤坂ではこういう舞台はないのです。あちらは飯を食うばかりという部屋になつていますが、こちらでは実はこの十日、それから十二日にも昼食会が行われるとか、ASEMの外相会議とかいろいろあって、多様な利用にこ

の施設全体を使っていこう、赤坂よりもずっと広いお客様を迎えていこうということを内閣府さんはお考えでして、場合によってはこういった場所で講演会とか、開館式典のときにはここで金剛流のお能を舞つていただいたり、琴の演奏をしていただいたら、そういうことをなさいました。

これは舞台側を見た様子で【写真12】、こういう丸テーブルで会食することも可能になっています。

この天井は、実はスギと美濃紙でできている立体の帆を三枚積み上げて、十五センチのピッチで重ねたものが天井全体を覆っているわけですが、もともとは電球の球替えのためにこれを上げ下げする装置が一個ずつ付いているのです。それがあるならばそれを演出のために使つてしまおうということで、三層にして、全部下がっている様子がこれですが、例えば一列ごとに下げるとか、あるいは口の字型に二つの口の字をつくるとか、そういう変化ができるようなものにしてあります。

これは夜、対岸から見た晩餐室です【写真69】。迎賓館というのは、この写真でもそうですがどうしても昼間の写真になりますけれど、昼間はお客様は迎賓館にはいないのです。たぶん京都市中のどこかへ行つてらっしゃる。そして夜に帰つてくる、あるいは朝起きられてお庭を見るというのが普通で、昼間はいらっしゃらない。とすると、この顔がむしろ晩餐室の本当の顔になるというふうにご覧いただけたらと思います。

水を建物の際にまでもつていくことによつて、このように空間が倍に見えてくる。いきなりあでやかになつてくるというところです。ちなみにこれは家具も何も入つていません。

これが首脳会談の部屋です【写真13】。スタジオ的に庭園と室内が一体となつたような様子で首脳会談を世界に配信しようと。実はここにお座りになる首脳の方々は、反対側にある襖をご覧になるしかないのですが、それはそれ、彼らも仕事でここへ来ているわけですから、壁を見ながらお話ををして、カメラ側は佐野さんがつくった庭を俯瞰してカメラに収めて、「あなたのところの親分、ちゃんとアテンドしているぜ」とい

うのを海外の人たちにわかつてもらおうというお部屋であります。

ちなみにこの天井は、統括に大変ご苦労をかけて北海道にまで行っていたいたいような、そういう柱の木であります。会場としてお使いになるときはこういうレイアウトもありうるということです【写真14】。

これが夜見るとこうなります【写真70】。視線が下がりますので、真っ直ぐ見たら見えないものが見えてくるということで、天井のこういう飾り物、シェードなども水面に映すと見えてくる。これがまた風が吹くときれいなんですよ。シャカシャカいって。このような風情で、今日は「夜話」ですので、夜の景色をできるだけ皆さんにお見せしようと思っています。

これは首脳会談のお部屋です【写真71】。このへんに晚餐室があります。これはちょっと風が吹いていますね。

われわれが仕事を始めたときに、この仕事というのは「京都和風迎賓施設」という業務名だったわけですが、東京にあります赤坂迎賓館はご存じのように宮殿建築、それに対しても京都和風迎賓施設という、二つもそういう名前が付くといささかまいるわけですが、そのなかで純粹に和の空間をつくっていこうということです、今から入っていただくなろはまつたくの木造建築です。現代的な構造体、鉄骨とかコンクリートでつくったシェルターの中に大工さんが、屋根こそつくってないですが、その中に家を一軒つくり込んだ、そういうエリアがこちらであります。

これはそこに至る露地です【写真15】。床はパラジウムを釉薬とした陶板です。今日そこに来ている谷岡さんのところでつくってもらいました。

これは立札茶席です【写真16】。茶席でありながら、実はこれから行く大広間で会食していただくなろはまつたくの外國の方々がお待ちいただくためのロビーでもあります。この部屋も闇を意識した部屋ですので、写真で撮るところ

ういうところの縁に螺鈿が入っていたり、床が光ったりするのがよくおわかりいただけます。谷崎潤一郎ではありますけれど「陰翳礼讚」といいますか、「闇の美学」みたいなものがある程度表現できたらと思います。これはたぶん自然光が入っていると思います。そもそも暗いですから、外からのわずかな光がこんなにピカピカに光ってしまいますけれど。

玄関を真っ直ぐ入っていくと、これが玄関の上がり口【写真17】、寄付です。今はここに小泉純一郎首相の「坐春風之中（春風の中に坐す）」という軸が掛かっております。

これは日本側の参加者の座っていただくところです【写真18】。先ほどの立札席と比べると、やはりお迎えする側ですから少し控えめにしなければいけない、お客様第一という、そういうマインドの現れでしあが。

これが「和の晩餐室」とわれわれが考えておりました和会食棟です。全体で五十六畳ばかりあります、この床だけで四間あります。先ほどの晩餐室が金色を使つたり、截金も金ですし、壁面装飾も大変色彩豊かなものになつてゐるのに対し、こちらはモノクロームの色彩であり、自然な素材で、金に対抗して銀といふことで、実はこの部屋にも江里さんに截金を施してもらつてゐるのですが、こちらはプラチナを基調とした銀色をベースとした截金をつくつていただいております。

この天井は十二メートルの川上村のスギの板、吉野杉です。東京で「工事中に十二メートルの天井板をつくつて悦に入つてゐるバカが京都にいる」という噂がたつたらしいですが、そのバカは私でござります。もともと木というのは五十メートルからの高さといいますか、それだけ成長しているわけです。運びにくいまのですから人間がぶつ伐りにして、それを山から降ろして製材して「鉢木でございます」といつて売つている。そんな木はかわいそうじゃないか。今の機械力をもつてすれば運べるわけです。ですからこの木は川上

村から山を越えて、四回ぐらい途中で山道を切り返したと聞いておりますが、伊勢湾側にもつていて製材をして、その長さのままこの天井になりました。ちなみにこれは厚さが一・二センチあります。そういう天井であります。

こういった部屋をつくることは滅多にないと思うのですが、これで十二メートルあるのです。この座敷全体は安井塗工務店さんがやってくださいました。この天井は山本興業さんの作品ということで、彼の最大の仕事でしたでしょうね。鉋をかけていって、もう終わりかなと思つたら四メートル残っていたとこの前いつていましたね。そういう天井です。

これは座卓ですが、これも十二メートル弱あります。実は漆塗りです。接ぎ目なしというと日本では受けるのですけれど、実は自然素材でやろうとしてもこんな長くて狂わない木はないわけです。ですからこの下地は等厚合板です。同じ厚さの板を重ねてつくったものが基本にあって、その上から漆をかけてテーブルにしてあるといったものです。

この奥にあります絵は、今回のお仕事のなかでいちばん若い作家である菅原建彦さんの水墨画です。ここでは庭でできなかつたことをやろうと。庭のテーマに「水の輪廻」という隠れたテーマがあるのですが、そのなかで彼には、目の前に水がいっぱいあるのですが、実際にはない水の相を描いてくれと。例えば雨だって水の相ですし霧だってそうですね。そういうものを表現してほしいということで描いてもらいました。このへんは張り付け壁です。

この畳は中継ぎ畳という畳として、イグサの栽培から始めました。この中央部分で両側からイグサが入っている。通常は四千本ぐらいの畳表なのですが、ここでは一万本の畳表ということで、水本さんのほうにはイグサを植えるところからお願ひして、それを染めたりいろいろなことをやってこの畳にいたしました。

これは夕景です【写真72】。このへんから迎賓館が本番の時間になるという、そういう景色です。

和会食棟のいちばん奥、いちばん北のはずれにこのような広間があります【写真22、23】。ここでは自然の材が間に合つたものですから、これはケヤキの板でテーブルをつくってあります。一枚で一枚と、五十七枚チぐらいの板を二枚合わせてテーブルにしています。これは機械力を使って床下に沈めて収納してしまいますが、そういたしますとこの部屋全体が畳の部屋になります。今のかたちは食事のときで、すべて仕舞つて畳の下に入れるとお客様のご夫人方に生け花を体験していただいたら、着物を着ていただいたら、多様な畳のうえでの日本文化を紹介する場所として使っていただけたらと思います。

先ほどの大広間が非常にかたい部屋であるのに対し、こちらはできるだけやさしい女性的なといいますか、最近はやさしいのは男かもしれませんけれど、そういう部屋にしたいと思っております。

その向かい側にこういうのが出てきまして【写真24】、これはあちらに座つておられる三谷さんと、イサム・ノグチの石の彫刻をずっとつくるおられた香川県牟礼の和泉正敏さんとのコラボレーションでできた、かなり豪放な機械力を背景にした現代の庭がここに出現しております。中央の石で四十八トンだそうです。だいたい京都の滝というのは、石が三分の二とか四分の三とかは地面のなかに潜っているものだと私は思つておりますが、これはなぜか宙に浮いているのですね。石のあちこちから水が落ちるという撻破りの庭でございます。これはこれで日本の庭園の系譜のなかで非常に構成主義的な庭という系譜もあつたと私も思いますが、その流れのなかではこういう庭もあるのだろうと思つています。あとで本人からこのへんで意見があろうかと思います。

建築と庭園が今回はほとんど同時に仕事をしないといけないので、統括には大変ご苦労をかけたわけですが、そういったなかで普通だつたらまず庭を先につくつてしまふとか、あと一年工期がいるとか、かなり早く

い時期はそういうふうにいわれましたが、見事に同時に終わらせることができました。これはいつべん四国で仮組みをして、奥から順番に積んでいきました。だいたい半年ぐらいかけて仮組みしました。いわば移築をしてその工期に間に合わせたという裏技を使っております。

これは同じ広間の西側の庭です【写真25】。ここからが本来行かないところです。主賓の館に向かうキングスロード、王様だけが通る道の途中にこういう月見台があります。この池には和船が置いてあります。船がここへつけられるようになっています。かなり演出過多かもしませんが和船でここまで送れるようになっています。去年の九月にはここで実験をしたのです。コンパネの上でちゃんと月が見えるかどうかとうのをやったのですが、今年はこの上でもう一回やれたらと思っております。

ここから主賓の館になるわけですが、その廊下のその途中にこういった竹穂垣でスクリーンができるいます。この反対側は随行員の宿舎です。これがないと、見たくもないパジャマ姿なんかを見るはめになるものですから、そういう意味で目隠してこういうものがあります。この竹穂垣はリバーシブルになつております。反対側は黒文字垣で、タケとクロモジと苔というシンプルな庭がこの裏にあります。

先ほど申したように、迎賓館の宿泊エリアはほとんどシークレットゾーンということで紹介できないのですが、これは中村外二工務店さんに大工をしていただいた座敷です。このほかにもちゃんとしたベッドルームが二部屋あるのですが、こちらは和の寝室ということで、こういう部屋を一部屋プラスアルファでつくります。こちらの写真のほうがいいですが、これは霧島杉の天井、これがマツの床柱です。昨日、統括との仕事をやってくれた升田棟梁と、先ほどの和会食をやった斎藤棟梁の二人でお話しましたが、「いちばん金がかかって」というと「そういわんといってくれ」といわれましたけれど、そういうお部屋であります。その前には、これは佐野さんが腕をふるつたエリアですが、京都そのもののような庭が展開します。

これが今座敷の前の庭です。これもやはり敷地の中から出た石を精緻な技巧で、霰こぼしという舗装をしました。これは玉利（小林造園）さんがやったのですが、八ヶ月かかって、一日に尺角ぐらいしかできないのですが、それをしこしことやつてくれたという庭であります。これは夜の姿といったところです。

今日はちょっと前置きが長いですが、これが夜です【写真73】。光って倍になつて、月が映るという、今頃の時間に行くとこういう景色が見られるのですが、残念ながら皆さんは入れませんね。ということで終わりまして、やつと本題に入ります。

今日の話は、誰が付けたか「技・業・waza」ということで、今日はお二人にそちらにお座りいただきておりますが、「技」は江里さんに、「業」は統括に、建設業というぐらいですから「業」は水本さんに、ローマ字で書いた「waza」は帰国子女のような三谷さんに、それぞれ語つていただこうと思っています。それではまず一番手として江里さんにお願いしたいと思います。

江里さんがなさった截金という技術は、副題を勝手につけましたけれども「復活した技能」というふうにいえるのかもしれません。今でこそ工芸界のスーパースター江里さんと截金というのは当たり前のように皆さんの意識のなかへのばらせておりますが、かつて一度はほとんど廃れかけた技能がもう一度近年蘇つたといいますか、火の鳥のようなものです。そういう形で今回、江里さんとんでもなく大きな仕事をしていただいたわけです。何となく伝統工芸というと寂しいところがあつて「大丈夫かいな」と思うところがあるので、「ちゃんと復活もするのだぞ」という意味も含めてお話ををしていただければと思います。

●江里　ただいまご紹介いただきました截金のことでお話させていただきます。この「技」の部分では、漆の世界、金工、陶芸、木工と、他にもお部屋のしつらえのためにいろいろな調度品をおつくりになられた方

がいらっしゃいます。そのなかで私は、晩餐室の舞台扉と、立派な黒塗りのテーブルがあります和食会食室の欄間、そして貴賓室のサイドボードとテーブルに截金を施させていただきました。

各部屋でそれに截金の技法の可能性に臨ませていただきました機会をいただきました。晩餐室の舞台扉に使われました板は、本来の素地そのままでも見事な木曽檜で、迎賓館ならではの銘木だと思いました。今回截金に陽を当ててくださるチャンスをいただき、ぜひ手がけさせていただきたいという思いと、本当にこのお仕事を成功させないといけないという思いを強く感じました。先人がこれまでずっと截金の技術を繋げてくださり、平成の今、たまたまこの御縁に出遇ったのは私ごとではなくて、截金の世界そのものが未来へと繋がっていかなければならぬという思いで、心から謙虚にお受けしたいと思いました。

私の工房ではその見事な檜材を入れることはできるのですが充分な広さがなく、傷めずに移動させながら、遠目から眺めつつ制作することは不可能ということがわかりまして、どうしようか思つていてるときに、南禅寺の管長様より塔頭の寺苑を使わせていただくお許しをいただきました。少し飛び地になりますが、泉屋博古館のすぐ側の光雲寺の空き地をお貸しくださいました。歴史のあるお寺の中で、この迎賓館のお仕事をさせていただけたのがたさは、最後に完成したときに本当の喜びとなりました。

このお仕事に携わるにあたりまして私は自然や美しい京都の四季を身近に感じてみたいと思つたのです。お寺の梵鐘が朝な夕なに時を知らせ、周りを包みこむ温かさはとても心に響きました。そばでは小鳥のさえずりや川のせせらぎが聞こえました。空き地の上に大きなプレハブを建てていただいたので、あちらこちらで下敷きになつたはずの草木が芽を出し、小さな花を咲かせていました。そこで生命というものを感じ、自然の中で生かされていることを大切にしなければいけないと感じながら制作に取り組みました。

晩餐室の舞台扉のお仕事をさせていただきました前に、まず、晩餐室というものをどういうふうな感覚でお仕上

げになるのかということを知りたいと思いました。日本画の鹿見喜陌先生がお書きになつた絵を川島織物さんがタペストリーに織られるとき伺いました。それを中心とした周りの調和、しつらえがどういうものになるかということを思いながら、何種類かのデザインを描いておりましたけれども、最終的に、タペストリーの藤の絵から舞台への視線の流れを考え、設計士の佐藤先生、また井上先生ほか皆さんにご相談した上でこのデザインにさせていただきました。

この場所は、世界の賓客が集まられるところ。文字や言葉には国境があるかもしれないけれども、視覚に訴えるものから何かを感じていただきたいと思いました。そしてまた、「現代和風」という言葉を聞くたびに、「和」という言葉がずっと気になつておりました。心に響いてきたその「和」というものの、どうすれば「和」が表現できるのだろうか、奥深い「和」の根源を辿らねばと思い、考えに考えて、考え至つたところは聖徳太子の「和を以て貴しとなす」というお言葉です。この場所は平和の「和」でなければならない。各国いろいろな方々が一期一会で集まられるなかで、言葉を超えた和みというものが「和」となつて、ここから世界平和を発信してほしいと思いました。

そういう意味で、人と人との出遇いや交わりを、金色とプラチナの銀色とが交錯するという形でデザインさせていただきました。金はそばにプラチナの銀色があることによって温かみを増しますし、銀色のプラチナはそばに金色があるからこそ強さがより表現できます。これは人は一人ではなくて支え合って生き、お互いを尊重し引き立て合うことにつながると感じ、そういうものが表現できればと思い、このようなデザインとなりました。

截金の作業ですが、まず、薄い金箔に六枚の厚みをもたせます【写真48】。二枚を重ね炭火にかざして焼き合わせ、それを繰り返しまして六枚の厚みにいたします。金箔というのはもともと金に僅かの銀と銅を混

せて溶かしたものインゴットにし、それを薄くスライスします。そしてプレスにかけて伸ばして、五センチ角ぐらいのものを紙の間に挟んで、叩いて薄くしたもので。そうしてつくられた箔は多くの工程を経て私のものと届きます。大切にしなければいけないものを使わせていただいて、そこまで薄くされた金箔をまた六枚の厚みに重ねるのです。とても時間のかかる工程を経なければなりません。

なぜそうするのかというと、それが「伝統の技術」であるということを私が強く感じたところでもあります。截金をはじめました頃、わざわざ焼き合させをしなくとも截金のできる厚みをもつ箔があれば…と思いました。そこで「六枚分の厚さの箔にしてください」と箔屋さんにお願いしまして、つくっていただいたところ、その箔は硬くて切れやすく、截金には適さないとしても扱いにくいものでした。技法の通りに二枚三枚と焼き合させていった箔には、高温の炭火にかざすことによって縮緬皺（ちりめんじわ）という皺ができます。その皺で箔が絡み合い、ゆっくり熱が加えられることによって截金用のコシと艶のある箔ができます。それを竹刀で細く切りますと断面にダーツができるで。ですから直線だけではなくて曲線を描くとき、そのダーツのあるところが伸びてくれるわけです。硬い箔では描けない、美しい曲線が描けるということを実感し、先人があみ出された「伝統の技法」の重みをあらためて感じました。

箔を細く切る竹刀も篠竹を使います。金属は静電気がおきますので使うことはできません。鹿革を貼った台の上に焼き合せた金箔を置いて一本ずつ切ってゆきます。もっと堅い表面をもつ竹もあるのですが、それでは箔を切る台の鹿革まで切ってしまいますので、やはり篠竹にかえります。

師匠から教わった技法を踏襲しながらも、他にもっと良い方法がないかいろいろなことを試みました。しかし全部師匠から教わった伝統の技法にかえってゆきました。それが伝統のすごさだなと思いました。何百年と伝わってきた技法を、私自身が「この時代に」という思いでやろうとしたけれども、その伝統の

重さというもの、また先人のあみ出された知恵のすごさとご苦労には敬服致しました。

十一センチメートル角の箔を台の上にのせて、竹刀で一本ずつ、目分量で切っていきます。定規を置いたりすることはできませんので、全く同じ太さに切るには集中力と熟練を要します。本数にしたら何万本になるでしょうか。今回、晚餐室に使わせていただいた箔は、おそらく私が今まで仕入れたなかでいちばん多く用いたと思います。今は金沢でつくられているのですが、京都の業者の方から箔をいただきました。箔を焼き合わせること、そして切ることで約一年三カ月かかりました。そのあいだにプレハブを建てていただいたり、準備をして臨んだわけです。

和食会食室ですが、普通の家にはない大きさの欄間です。ここは皆さんのが会食される場所で、モノトーンで色がないということでしたので、宇宙を表現したく、画面から大きくはみ出るほどの月をグラチナの截箔で表現しようと思いました。特製の定規をつくりまして大きな彎曲を表し、截金を施こしました。欄間ですから向こう側にもお部屋があります。それで日月として、もう一方に太陽を表現しました。太陽がまさに昇るところの煌々と輝く部分を金箔の截箔で表現しました【写真52】。

次に貴賓室のサイドボードですが【写真56、57】、今までなかつた技法を使わせていただきました。私はこれまで、ガラス、布、紙、木、陶器、磁器、いろいろなものに截金を試みてまいりました。その中でも二十五年ほど前から、今まで漆の世界にはなかったものを試したいと思いました。截金の上に漆をかけることを考えました。截金は膠と布海苔で貼っているだけですので、漆を刷毛でかける際、貼ったものが剥がれてしまえばそれてしまいなのです。失敗した場合は全部取って、またやりなおしです。これまでに棗などの小さな作品に施していった技法ですが、今回、その小さな棗のような作品を見てください、これをサイドボードに、といつてくださいました。そのような大きなものに施すということで非常に不安をもちましたけれども、

新しいものに挑戦したいし、また新しいものを生みだしたいということから、サイドボードの扉のところにさせていただきました。漆の特性で、紫外線を受けることによってだんだんに透明度を増してきます。そうすると時を経るにつれて中から施した金が浮き上がってきます。そういうふうな新しい世界の試みをさせていただきました。

もしこの迎賓館建設のお仕事の機会を与えていただかなければ、日本に伝わる和風建築におけるすべての分野の伝統工芸に心がここまで動いただらうかと思いました。迎賓館の中にしつらえられたものは日本人の持つ感性に合い、涙の出るほど素晴らしいものだと思いました。皆様方の汗の結晶だと思います。建設の途中、私は何度も迎賓館に足を運ばせていただきましたが、夜となく朝となく、皆さん燃えるような思いでお仕事に携わっていらっしゃいました。TVの「プロジェクトX」ではないですけれども、無から有を立ち上げる、その仲間に入れていただいていると思うだけで嬉しく、こういうお仕事に携わさせていただいてよかったですと、仕上がるまでにも喜びを味わせていただきました。最後まで無事に完成することを願いながら携わさせていただいたお仕事でございました。

ぜひ皆様にじかに見ていただきたいのですけれども、こういう形でしかお伝えさせていただけないのは残念です。日本の技術、技というのは生きていた、そしてまたこれからも繋げていかないといけないという思いをなおさら強くいたしました。微力ではありますが私自身も、この日本の伝統の技を若い人たち、伝統工芸を志す人たちに少しずつでも伝えていけたらと思っております。

●佐藤 京都迎賓館はお国の施設であります、通常、公共工事、いわゆるハコモノというのは、設計図があつてその図面に基づいて各施工会社さんが見積をつくり、一般競争入札という形で最も値札が安い施工会

社さんがそのお仕事をなさるというのが通常ですが、京都迎賓館も公共工事であることには何ら違はないわけですけれども、本来この施設が最終的にもつべき姿というものがはたして一般競争入札という発注方式で、京都あるいは日本に連綿と培われてきた技能が生かせるのだろうかという疑問がありまして、今回の工事ではわが国として初めて、伝統的技能に関わる業務をまず十一職選定して、その方々から設計図に基づいて見積をいただき、例えば三社なら三社から見積をいただいて、そのなかではいちばん安い値段を決めるわけです。

先ほど江里さんがおっしゃったような伝統工芸に関しても同じように、やはり量よりも質を守ろうという観点で、建築のときも伝統的技能活用検討委員会という中村昌生先生を座長とする委員会で、われわれが勝手に思ったことにいろいろご指導いただいたお決めいただいたのですが、工芸に関しても有識者会議というものをおつくりいただきて、やはり中村昌生先生が中心になつて「この人ならよかろう」といつていただきような形で仕事を発注させていただきました。

それに際して、やはり初めての試みでありますし、そもそもこんなことが国の工事でできるとは思わなかつたのですが、それをやってくださいというふうに頼まれた水本さんの苦労やこれいかにというふうに想像するわけです。先ほど江里さんの工房が写真の中にも出てまいりましたが、ああいった場所をおつくりになつたのも水本さんですし、工事に際して大変高価な材料を職人たちがお使いになるわけです。江里さんの金箔にしても大変なお金がかかるわけです。通常工事は出来高払いということで、終わつてもものになつてはじめてお金が出てくるわけです。それを施工会社さんがどこかで立て替えてなければいけないという、そういうようなことでずいぶんご苦労をかけました。それは「プロジェクトX」の水本さんだからやれたのだと思ひます。通常の施工会社さんではありえなかつたような運営をしていただいて、今回大変大きな功績をお

残しにいたいたと思ひます。

そのへんのご苦労話と、これから先こういった技能はどんどん使われなければなくなっていくわけですが、そのなかで大阪大林ビル、桂離宮、一心寺、彦根城博物館、そういった建築にずっと携わってこられた水本さんに、現在に繋がる「業」「心」みたいなことで語つていただければと思ひます。

●水本 江里さんのいい話のあとに、あまり面白くないと思ひますけれど。とくに伝統技術が、今回十一職の皆さん方の仕事をかなりピックアップしていますが、私どもの仕事は何かといいますと、やはり官庁の仕事でございますから、設計書に基づいて、無災害で、最後まで品質をチェックしてお納めする。そういう工程とか安全とか、もちろんお金も品質もそうですが、そういうものをきちんとマネージメントして所定のものに納める。一言でいいますと、そのマネージメント力がわれわれの業でございます。

今回の工事に関しては、最初に私は自己紹介でも申し上げましたけれども、とくに伝統技術の分野では並みの人ではできない内容の濃いものでございまして、結果的に私はそれで定年が延びてしまったのですが。こういう工事をやる場合、とくに伝統技術とこういう皆さん方の工事を、どのように最大限の力が發揮できるような条件をつくるか。僕らには何の技術もないわけで、マネージメントが技術なんですから、そういう伝統技術の皆さん方の力を最大限に發揮できる環境をつくる、これが私どもに課せられた仕事だと思っています。

われわれの仕事はそういう伝統技術の皆さん方の傘になると。風よけになり雨よけになつて、その傘の下で十分実力を発揮していただきたい素晴らしいものをつくついていただくというのが、私が最もとしているところでございます。

今回そのように伝統技術の皆さん方が非常に注目を浴びているわけですけれども、やはり現場を進めていくには、躯体工事をやる大工さん、鉄筋屋さん、薦の人、土工の人、こういう人たちが着工当初から素晴らしい現場を形成していく、そして伝統技術の方をはじめ皆さん方に現場の雰囲気を継いでいくという、非常に重要な役目をしているわけです。その人たちを教育して、迎賓館レベルの工事のいわゆる監理状態といいますか、素晴らしい現場監理ができている、素晴らしい現場の雰囲気をつくっていかなければいけません。それはまた私の仕事でございまして、今回この迎賓館は外から常に見学に来られますし、大手三者のJVの工事でございますから、われわれの会社の技術も問われます。ただ法律的に満足していたらいいという現場ではございません。

そこで私はこの現場で精神的に職人の皆さん方に訴えようと。こんな素晴らしい工事は百年、二百年、三百年経つても出るような仕事ではないのだから、この仕事に携わることを誇りに思いましょう。お互に持っている技術を最大限に發揮して、平成の名建築と呼ばれる建物に仕上げようではないかということで、私は当初「みんなで平成の名建築を」というスローガンを立てて、職人の皆さん方には「この工事に携わったことに誇りをもってください」ということをベースにしまして現場を立ち上げてまいりました。月一回とか、毎日もありますけれども、全員を集めてこのような話をさせていただき、「あなたたちがやっていることがどれだけ重要か。世界に誇る迎賓館をつくるためにどれだけあなたたちが力になっているか」ということを訴えかけて、素晴らしい現場の雰囲気づくりをいたしました。

例えば仮設物をやる場合でも、普通だいたい平行、直角、水平という三つのポイントを基準にして、例えば手摺りをつくったり、通路をつくったり、材料を置いたりということをベースにやりますが、ここではもう一つ要素を入れる。そこに直線を入れました。直線的といいますか真っ直ぐ、とにかく通路はストレート

に真っ直ぐ取る。手摺りは真っ直ぐできている。このへんの絵はそれなのですが、そういう仮設物で、もので見せて、心で訴えて、そしていよいよ仕上げの段階に至ってきます。

はつきり申しあげて、伝統の三十社の皆さん方というのは大きな現場の経験はあまりございませんので、安全のことについても普通のわれわれが使っている業者とは違つてあまりわからないところもありますが、そこに入つてくることによつて自然に同化される。そのなかで自然に溶け込んで、普通の大工さんや鉄筋屋さんがつくつたその雰囲気のなかに溶け込む。そうすることによつて現場のグレードが全部上がるということが、私の目論見でございました。これは僕がやつたというのではなくて、京都迎賓館という素晴らしい日本のものをつくるのだという一つの錦の御旗が、今回の素晴らしい現場をつくりあげた大きな要素ではないかと思います。

私の業というかどうかはわかりませんが、とにかく仕事に惚れない。絶対に仕事に惚れない。惚れたら前が見えなくなつてしまふから、冷静さを欠いてしまいます。なかには仕事の途中でブチブチいっている職長さんも、おやつさんもいましたけれども、その人はその人です。私自身はやはりまず仕事に惚れないようになります。

もう一つは自分の目線を下げる。私は責任者です。「まあ、ええか」と目線を下げてしまふと、結局そのところまでしかものはできないわけです。最終的に本当の平成の名建築というのはどのグレードかと。先ほど佐藤先生からお話をありました、貴賓室に使つた栓という木は青森以北にしかない木です。木工会社の人が最初に見本を持ってきたわけです。見ると、全目を見ても色を見ても、「なんや、こんなもので、トップ会談をするような部屋に使う材料でええんかいな」という疑問がありました。「でもこれ以上ないんですよ」といわれて、「ああ、そうか」といえばそれですけれども、私はやはりここで目線を下げては

いかんと思いました。

たまたま今回の建設工事の委員会のなかに林野庁のお役人さんがおられました。それで升田さんに相談いたしまして、「この栓という木の上限を知りたい。これが本当にいいかどうか僕にはわかりません」ということで林野庁に申し上げました。するとさっそく帶広の営林署に檄が飛びまして、三ヵ月後に、足寄、陸別など三つぐらいにまたがつて国有林があるので、そこに五十本ほど生えているから見にこいというわけです。私は木を見てもわかりません。まして皮が付いた木ですからわかりませんが、北海道で長年山師をしている方がおられたので、その人と一緒に三日間山をほつき歩いてきました。

けものの道を歩いていると、横にペタッとしたところがあります。「これは何ですか」と聞くと「これは熊の寝床だ」と、熊の背骨の跡までついているんです。そんなところですから人が行けるようなところではないのですけれど、そうして山歩きをして、結果的に五十本のうちの四本を伐りだしていただいて持つて帰りました。

最終的に、そんなに栓という木に良い木はない。これは植林しているものではございませんので、自然に斜面に生えている木ですから、節があつたり目が流れたりしていますけれども、そういう木しかないということを納得したわけです。

そのように、何にしても目線を下げない。惚れない。これを私は徹底して、トータル的には冷静にこの工事をやり上げることができたのかなと思います。もちろん私だけの話ではございませんけれど、リーダーとしてとくにその点については気をつかってやつたつもりでございます。私は四十五年、現場一本できていましたから、そのへんの苦労は若いときにしていますから、女性にも惚れない。目線を下げない。女性に惚れるととくにわからないようになりますからね。そのようなことで今回惚れないということで、本当は少し惚れ

ましたけど、グッと辛抱して最後までやらせていただきました。

●佐藤 惣れないという話は初めて聞きましたね。そうでしたか。あとでもう一度お話をうかがう機会があると思いますが。今回の表題の「技・業・w a z a」というのは主催者側がおつけになつたわけですが、どういうふうにお二人の方にしゃべってもらおうかと思つたとき、この「w a z a」というのはやはりローマ字かなと思つて、長いことアメリカで仕事をしていた三谷さんに。十六年ですか。私が生まれる前からですね（笑い）。三谷さんは大学を出てからしばらく尼崎先生を頼つて京都で庭師をやつていたのです。限界を感じたのかよくわかりませんが、ふらりとアメリカへ行つてしまつて、そのまま向こうにずっといて、ピーター・ウォーカーという世界的なランドスケープデザイナーの事務所の極東の責任者で、豊田市の美術館の庭とか丸亀の美術館の前庭などをやってきて、久しぶりに庭師復活というのが今回の仕事だったのかもしねません。

私たちずっと日本にいる側からするとわかりにくいかもしれないけれど、佐野さんなんかはずいぶん海外でお庭をつくつておられます、外から見た日本の工芸みたいな側面で何かお話が聞けたらなということです無理やりお願ひしたいと思います。

●三谷 海外から見えるという話ですが、まずは全体の仕事の有り様といいますか、非常に難解といいますか難しい仕事であるということと、先ほど自己紹介で申し上げましたが、京都という土地と自分との距離みたいなもの、あるいは庭のふるさとといいますか、伝統的な庭の発信源であつたし、これからもあるであろうと思われる京都という場所で、私のような庭の生え抜きの専門家ではない人間ができるの

かなという話をしたいと思います。

先ほど水本統括所長が全体をまとめられたわけですが、そのなかで非常に苦労されたのとたぶん同じように、あるいはそれ以上に苦労された方は、庭園の工事には庭園JVという形で植藤造園さん、植芳造園さん、花豊造園さん、小林造園さんという四つの京都を代表する庭師のお店が束になつてあたつていただきました。世話役に西武造園という大手の造園さんが入つておりますが、そのまとめ役、棟梁をやつていただいたのが、前列に座つていらっしゃいます佐野藤右衛門さんです。佐野さんは見識がありますし、仕事をやってこれらた経験もありますし、私なんかは佐野さんの孫みたいなものでございまして、何をいおうと佐野さんは一旦決めたことはなかなか変えないじいさんでございまして、いろいろ楽しいことも楽しくないこともございましたけれども、基本的には性格は結構私は似ていると思うのです。

私は十六年間アメリカにいまして、庭というのは何か一つの形を崩しながら楽しみながらつくっていくと、いうもので、建築といいちばん大きく違うところは、例えば構造的に、あるいは安全上とか、法律があつたり規制があつたり、あるいは建築の空間のプログラムがあつたりとか、それでなければならぬという積み上げていくようなものではおそらくなくて、もう少しポエティックといいますか、遊びがたくさんあって、どこのあたりで締めて、どのあたりを筋にして、どういう形で固めていくかという話で、佐野さん独特の遊び方、あるいはアドリブといいますかそういうものの入れ方、あるいは全員でアンサンブルをするような場所とか、非常にメリハリの効いた庭になつたのかなという気がいたします。

佐野さんはおいくつでしたっけ。八十でしたか、九十でしたか。違いますね（笑い）。毎日現場に出てきていただきまして、夏は鉢巻き、いや、現場は鉢巻きは水本統括が許さなかつたのですが、夏も冬も現場に来ていただけて大声で、「ガラ悪いおっさんが一人おるな」と思つたら佐野さんでした。声が大きいという

のは長生きする一つの秘訣かもしません。腹の底から出るような声で、「ガラの悪いおっさんやな」という評判がたぶんたっていたのかなと思います。

そういう形でできた庭ではございますけれども、日本の庭というものの形がもしもあるとすれば、それはたぶん「心」の部分、あるいは先ほど江里先生もおっしゃいましたが「和」の部分であつたりするのかかもしれないなと思います。そういう平和な状態、あるいは調和した状態、形ではなくてそういう調和した状態みたいなものが変化しながら変わっていくといいますか、常に庭というのはスタティックなものではなくてダイナミックなもので、一日のなかの時間でもそうですし季節でもそうですし、例えば十年後、五十年後、百年後でもそなうなんですけれど、常に変化しながらダイナミックに成長していく、そういう出発点が今年の三月にあつたというか完成したといいますか、成長をこれから始めようとしているまだ一歳未満の段階でござります。

先ほど佐藤さんがいつておりましたいちばん繊細な広間のすぐ北側に、ちょっとダイナミックな感じにみえる、原始的といいますかプリミティブといいますか、石組みをしております。この写真【写真77】に出ておりますこの石は、迎賓館のプロジェクトに入る前から、私は水本統括とは逆でございましてすぐに惚れてしまふタイプで、この石にすいぶん前から惚れておりました。これ一つで四十七トンぐらいござります。東京のモノレールの車両一台が二十六トンですから、だいたいモノレール二台分ぐらいです。こうして見るとそんなに大きく見えないのですけれど、実際には畳六畳ぐらい、高さもそこそこありますから結構な重量になります。このこにだいぶん前から惚れておりまして、どこか機会があればぜひ使いたいなと思っておりました。

それをどういうふうに使うかということでいろいろと検討いたしました。見ていただいているのは、現場

で十分の一の模型を本当に土を使つてつくって石組みの検討などもしておりました【写真74】。こういうプロセスを経ながら、あるいは先ほど仮組みの話がございましたが、工期を短縮するための仮組みをやって、この写真で出ておりますのは、佐野さんのほうで全面的に気張つていただいた、これは佐野藤右衛門さんの山の部分での、もう一つやさしいほうの滝です【写真76】。水の流れは二本ございまして、一つが雄滝、こちら側は雌滝でございます。雌滝の仮組みをやっていただいているところです。

とくに佐野さんのお力を十分に發揮していただいた雌滝は自然石を使つております。当然その防水等の必要性のために躯体を打つておりますが、躯体の形状を決めるのに仮組というものがかなり役に立ちました。それよりも何よりも、工期の短縮というものに非常に役に立つたというところであります。

●佐藤 外から見た日本の技術という点ではどうですか。

●三谷 外から見たらどう見えるかなというのは、すごく悩んで、京都に来てどういうものを見て「日本的だ」と感じるのかなとショッちゅう考えていたのですけれども、結局それは形ではないだろうというのが、私が本当に思うところなのです。それに加えて京都の庭というのは、最近でこそすいぶんと環境という話がわれわれのこれから課題であるという形でアピールされるようになってきたのですが、やはり多様性があるということと、それと誰もが記憶に残してしまうといいますか記憶に残るといいますか、何かを感じるというのには、例えば石であれば、私個人的には大きいとかきれいであるとか、何かすごく挑戦的であるとか、やさしい広場に荒々しい石組みをということをやらせていただいたおかげで、みな印象に残る、外国から来た人も腰を抜かすぐらいのものをつくりたいなということは思つていました。外から見た話になかなかなつ

ていなくて、もう私は日本に帰ってきて八年でございますので。

●佐藤 ではあきらめます。時間が今八時で予定の時間です。だいたい私が十分以上余計な話をしたからいけないのですが。近年、環境云々で「もったいない」ということが海外のほうからいわれていて、「もったいない」というのが環境を守るための特効薬のようにいわれていて、いささか心外ではありますが、やはり日本という国が「もったいない」、あるいはとくに実に丁寧に限りある資源をというか、材料を選んでそこに精緻な技能を加えてものにしていくという、そういうことはこれから先、この前の講演会で「伝統技能はどうなるんだろうか」という感じがあつたからなのですが、本当の意味のグローバルスタンダードというか、これから先の地球とか、あるいは人間の生き方として、日本がもつてきたそういう感性がキーになるのではないかと思います。

前回の講演会でも申しましたけれども、「暮らしのものを芸術の域まで高めた唯一の国民が日本人かもしれない」、これは中村昌生先生がおっしゃっているわけですが、最近はまた「千利休は思想家であつて、思想を伝えるためにお茶をやつたのではないか」と先日の「京都新聞」に書いておられました。そういうなかで、技能というものから生まれる形もそうなのでしょうけれども、その技能に立ち向かうマインドというのは、場合によっては今の環境問題とともに含めて、拜金主義を脱して、人間が本当に豊かになるために必要なことの一つのヒントになるのではないかというところに話をまとめていきたいなど、少し格調高くいきたいなと思っているのですが、江里さん、そのへんはどうでしょうか。

●江里 今まで伊勢神宮の素晴らしいに接し、二十年ごとに造り替えられる意義をおうかがいして存じてお

りましたが、そのことの大切さを、このお仕事をさせていただくようになつてあらためて深く感じるようになりました。

今、佐藤先生がおっしゃったことに繋がるかどうかわかりませんけれども、本当にいい材料を使つていいものをつくることが、逆に残ることであり、ひいては伝わっていくものだと私は思つております。着物もうだと思います。本当にいいものは何代も着られます。前回出られた喜多川先生は「本当にいいものをわかつていただける時代ではないのだ」とおっしゃっていましたけれど、そういういいものだからこそ伝わつていつて欲しいし、厳しい時代なのかとも思いますが、本物の良さを知つて欲しいと思います。

自然の良さが生かされ、そして大切に使われ、扱われるという文化をなくしてはならないと思ひます。本当の良さがわかれれば絶対に無駄にはしないと思ひます。端々まで使おうとします。いい材料であれば、その端から出たものも何とか生かそうとする。ものづくりの人たちはいいところだけを使う仕事もあるでしょうけれども、残されたところも生かそうとするものづくりの心を持つてゐると思ひます。この素晴らしいものは、やはり知恵とかそういうもので、私自身はもちろん「もつたいない」といわれるその言葉を大げにして、技術だけでなく心も伝えていけたらいいなと思つております。

今回のお仕事は、本当に私一人でできたことではなくて、一緒に仕事をする仲間がいて、この度のようなお仕事をさせてくださる方、支えてくださる周りの皆さん、そして見てくださる方がいらっしゃつてはじめて技術が生かされました。人との出遇いを大切にしてゆきたいし、そのことが心を伝えていく、また技術を伝えていくことの一つであるというふうに感じました。

先ほどから申しあげたかったのは、横におられます水本さんが「江里さん、本当にいい仕事をしてください。それだけです」と言って下さり、素晴らしいプレハブを建てて下さいました。その中でお仕事ができました

ことです。ものづくりにとりましてこれ以上うれしいお言葉、ご手配はございませんでした。そして佐藤先生がおっしゃったように、皆さんのが声をかけてくださったことにより今回こういうお仕事をさせていただきましたことに心から感謝を申しあげたいと思います。今日またこうして皆さんのがお集まりくださいた席で、このことがお伝えできたことは私自身本当に幸せなことでございました。ありがとうございました。ありがとうございました。

● 佐藤 では水本さんどうぞ。

● 水本 伝統技術の話ですけれども、ちょうど二十三年前に桂離宮の御殿の解体修理をやりました。今回この迎賓館にそのまま現役で来ている方、佐野藤右衛門さんがそうですし、それからこの工事に来られて、「いい仕事をしようや」といいながら途中で亡くなつた方、例えば松村泰山堂の社長さんとか左官の卯田さん、この方は今回の聚染の土を、塗れるところまでちゃんとつくりあげて、そして自分で塗ることもなく亡くなつてしまつた。桂からあとでいえば、次の代の人たちにほとんど参加していただいているわけです。

本当にこんないい仕事はしょっちゅうあるわけではないですから、京都の職人衆は日頃は苦しい目をしながら、伝統技術を何とか繋いで、こんな簡単な言い方をしていいかわかりませんけれども、やはり二十年なりに一度こういういい仕事が出てくる。桂もそうだったと思ひますけれど、いわゆるゆかた会なのですね。今までもってきた技術をご披露できるゆかた会。こんな簡単な言い方をしてはいけないと思いますが、そういう意味で桂の仕事は値打ちがあつた。とくに今度の迎賓館は伝統技術を残すための核になりえたのではないかと思うわけです。

心配なのは、今、江里さんがおっしゃいましたけれども、これからです。次にこういう最高級の仕上げを

使った仕事が出てこないと繋がっていかないという心配を私はもっておりまます。私はたまたま桂と迎賓館のお仕事をやらせていただいて、伝統技術の良さといいますか、その伝承ということについてそのように感じてゐるわけです。今後またそういう素晴らしい仕事が出来ることを期待したいと思っています。ありがとうございました。

語り出す庭園 和の風景

コーディネーター

株式会社日建設計理事・技師長

佐藤義信氏

パネリスト

京都造形芸術大学副学長・日本庭園研究センター所長

尼崎博正氏

植藤造園十六代目

株式会社日建設計設計長

佐野藤右衛門氏
三谷康彦氏

●佐藤 定刻になりましたので始めたいと思います。表題にありますように、現在京都迎賓館で一般参観をしておりますが、三十倍という倍率で、なかなか望みが果たせなかつた方多かつたと思います。そういうこともあってこういう講演会が企画されたわけです。今回は第四回、本日の題は「語り出す庭園 和の風景」ということで、京都迎賓館の庭に関係なさつた三講師をお招きしてお話をうかがうことにしております。今まで私が迎賓館の概要を説明してから講師の方々にお入りいただくことにしていましたが、今日はどんな画像が出るかということを先に見てもらおうということで、今からご入場いただきます。皆さん、拍手をもってお迎えください。

いちばん手前から尼崎先生、中央が佐野藤右衛門さん、いちばん左が三谷さんです。非常に個性的な三人

です。お三人の経歴等は先ほどのリーフレットに書いてありますので、ごゆっくりご覧ください。今までは比較的「私」主導型というか、講師の皆さんご本人が素直にいろいろなお話をしてくれたのですが、今日はこの三人が揃うとどういうことになるやらということで、それを期待していらっしゃる方もずいぶんいらっしゃるのではないかと思いますので、まずはざっと私のほうから迎賓館の概要をご説明申しあげて、そのあと三人のバトルに入っていきたいと思います。

これは京都迎賓館の模型写真【写真67】ですが、大変精密にできております。これは京都御所、こちらが大宮御所です。ちょうどどこの位置に京都迎賓館、東西で百メートル、南北で約二百メートルの二ヘクタールの敷地に今回建設されました。この場所はかつて昭和天皇が即位なさったときの饗宴会が昭和三年に行われまして、その跡地を今回京都迎賓館の建設場所ということで、京都でいえば座敷中の座敷といいますか、最も格調があり歴史的背景のある場所に、それも素晴らしい環境のなかに京都迎賓館が誕生したわけです。

施設の概略を申しますと、だいたいトータルで一万六千平米、五千坪ぐらいの建築ですが、そのうちの約半分以上が地下に埋もれています。東京ディズニーランドのお客様が使うところは地上にあってサービス部門はみな地下にあるというのは、私はほとんど行ったことがないので知らなかつたのですが、「あつ、同じやん」と思いました。この施設も機械室や駐車場といったサービス部分はすべて地下、地上階はお客様が使う部分、あるいは管理・運営される方が常にいらっしゃるお部屋だけが地上にあります。

京都のまちはだいたい百分の一勾配で、百メートル立って一メートル下がるという地勢をもっています。この敷地は南北二百メートルですので、こちらとこちらで二メートル落差があります。その北のいちばん高い位置に外国のお客様の宿泊室があります。こちらは真っ白で中が何もわからないように表現してあります。が、これは国際通念上、お客様に「ご自分の家だと思ってどうぞお使いください」というふうにお貸しする

のがお付き合いの仕方だそうで、そういうことがあって、いわば私的な空間ということで今回発表を控えさせていただいております。中央部分が儀礼の場、公の空間です。西側に正門がございまして、玄関に車を寄せてご入場いただくということです。ここを通り抜けるというのは、迎賓館というぐらいですから迎賓・送賓の場で、儀式の場がこのへんにあります。いちばん南側に大会議室、玄関の対岸に晩餐室という大きな部屋が二つあります。

今回、庭園に関してもそうなのですが、建築的にも対称性というのを排除してできるだけ非対称の施設配置になつておりますが、唯一この玄関と晩餐室だけは軸線が揃つて、それ以外はみなバラバラというか、すべて非対称の空間構成になつています。晩餐室の奥に線がたくさん入つてますが、これは実は畳の線です。大広間と、広間がござります。「京都和風迎賓施設」というのが当初の業務名であったように、畠の文化そのものをお客様に体験していただく空間がこのへんにあります。その対岸に会談室、それから日本側の代表者が控えていただく貴賓室という部屋があります。この会談室は庭に直接面する部屋になつております。上から見るとこのような姿で、こちらが玄関、この奥が晩餐室、このへんが和会食棟です。これが宿泊室です。今日はあまりお見せできないのですが、宿泊室、和会食棟、晩餐室という関係です。これは東の山です【写真1、2】。

「真・行・草」といきなり出できますが、庭を考えるにあたつて三つの相といいますか、われわれの設計上の概念の整理かもしけませんけれども、いわゆる楷書というか堅い空間から、非常に草深いというかくつろぎが感じられるような空間に順番に性格づけをしていこうと考えました。この写真は正門から玄関を見ていただいた様子ですが【写真3】、真の庭、前庭とあります。こちらが正門で、この写真を撮っている位置が玄関ですが【写真4】、そのあいだにこのようにまったく水平性が保たれた花崗岩板石、これは山口県徳

山産の石ですが、儀礼の場として使える庭になっています。その庭から玄関【写真5】。この下にちらりと見えるのがこれから出てくる回廊の庭ということです。玄関の段階ではなかなか庭は見せない。こういった形の回廊がまず庭をめぐる形で玄関の周辺に展開します【写真6】。

こちらの奥が晚餐室で、今は玄関の近くにいるわけですが、まず玄関を入ってすぐの位置にこのような非常に水の浅い、それも石だけで構成されているような庭が展開します【写真7】。このへんの解説はあとでお三人からしていただけたらと思います。それを逆の南の東のはずれから見た様子です。これは回廊のすぐ脇にあるロビー溜まり、少人数の方々がここにお控えいただく部屋です。

いちばん施設のなかで南にあります大会議室【写真9】です。これは閣僚級の会議をするということを主な目的につくられてますが、晚餐会のときは椅子などの家具や照明等を替えまして、ロビーのようにお使いいただくということも考えられます。奥には綴れ織で愛宕山をデザインした壁面装飾が施されております。これが晚餐室【写真11、12】です。迎賓館のなかで最も広く、かつ天井の高さが高い部屋です。先ほどの大會議室とこの晚餐室だけにこのような固定的な壁面装飾が施されております。いずれも綴れ織です。天井は美濃紙と杉材で、立体的な廻のようなもので、いろいろ変化する天井ということになつております。

大池の庭です【写真78】。「水の輪廻」というふうにいつの間にかテーマができていますが、これは中央の庭です。先ほどの回廊の庭は水の深さが浅かったわけですが、こちらへ来るとずいぶん深くなつて、現在こちらには新潟県の震災を通り抜けてきたコイが百十五匹ぐらいいます。チビもずいぶん増えています。

奥に見えるのが主賓の日本における館です。この部分は実は食堂です。この左側にあるのが首脳会談をしていただくお部屋です。その庭を反対側、対岸側から見た様子です【写真79】。こちらが和会食棟になります。

この部屋が首脳会談をしていただく部屋です【写真13】。先ほどの晩餐室、大會議室といった部屋は庭とのあいだに幅の広い廊下がありますが、この部屋に限つては直接庭園に面するというか水と面しています。この部屋で首脳会談をしていただくわけですが、こちらに両首脳にお座りいただいて、その会談の様子を世界に配信したいと考えたわけですが、その折に庭園の姿をカメラに入れて庭の環境と一緒に首脳会談をやつていらっしゃる様子を伝えたいということで、あいだには廊下のようなものはまったく介しないで直接庭に面する形の部屋にいたしました。これは同じ部屋ですが、家具の様子を替えて【写真14】

これはまた反対側に回りまして、和会食棟の露地の部分です【写真15】。当初より京都の方々からも「なぜ木造でつくるの？」というお声があつたかと思いますが、そういった部分もできるだけ増やしたいということ、現代技術でできたシェルターの中に大工さんが家を建て込んだというような構成になつています。ここで使っている材料はすべて無垢材です。銘木類が多いですが。こちらは露地のいちばん突き当たりにあります立札茶席を見立てたロビーになっています【写真16】。そして玄関です【写真17】。今日現在ここに小泉首相の軸が掛かっています。「坐春風之中（春風の中に坐す）」という軸が掛かっております。

こちらは入ってきたところの日本側の待合室です【写真18】。大広間で最大二十六人規模の会食ができるわけですが、半分の方は先ほどの立札茶席でお待ちいただいて、半分の日本側の方が先ほどの円座のあるこちらでお待ちいただことになります。規模は五十六畳あります。先ほどの晩餐室が洋の晩餐室とすれば、こちらは和の晩餐室と位置づけまして、あちらが非常に色彩豊かな空間に対して、こちらはできるだけモノクロームの世界にしようと、素材がそのまま表現される空間にしてはどうかということを考えました【写真

ルの長さの吉野杉の天井を張つたりということで、伝統的技能もさることながら、現代技術を背景としなければできない、例えば輸送手段、昔ですとこのような十二メートルの材料は運べなかつたわけですが、そういったことを背景にしなければできないようなことを多々やつております。例えばこの床も四間あるので、そのぶんだけ大工さんが大変苦労したと第一回目の講演会でおっしゃつていました。これは反対側を見た様子です【写真20】。

この部屋の向かいに展開するのがこういう庭になつていています。ちょうど今の大広間の主賓の席から庭のほうをご覧いただくと、こういう景色があります【写真21】。ここに変な石が立つております。外から見るとこのようなことです【写真81、82】。

和会食棟というエリアのいちばん北側に、先ほどの大広間は非常に儀式めいた部屋ですが、もっと気楽にお使いいただきたいということで、こういう小間を、小間といいながら広間ですが、広間をつくりました【写真22、23】。右側に滝が見えますが、あとでアップが出てまいります。こちらでは長押とか建築のなつで不必要的要素ができるだけ減らして、気楽にお使いいただけるようになつています。ちなみに中央のテーブルも機械力で床下へ収めて、すべてを畳の部屋にすることも可能になつております。

非常に女性的というかやさしい部屋の対岸に、このような大きな石で構成された庭があります【写真24】。これでだいたい四十八トン、あとで仮組みの写真をお見せできると思いますが、人が立つとこの石の大きさがわかると思います。全体を瀬戸内の石でまとめた庭です。今のお部屋の西側を見た様子です【写真25】。京都特有の台杉などがちらつと見ていただけるかと思います。

こちらは行つてはいけないエリアです。主賓室に行くキングスロードといいますか、お渡りいただく通路の角にありました向月台です。先ほど佐野さんに「これは月見台なのか向月台なのか」と聞いたたら、「やは

り向月台だろう」といわれたものですから訂正いたします。このへんから月がスースと出てくると。去年は実はこんなふうにはまだできていませんで、コンパネを敷きまして月見ができるかどうか試しました。今年はどうしようかと思っています。

その端のいちばん奥、主賓の部屋に行く通路の途中にこのような竹穂垣がございます。今日もこの会場にお出でいただいておりますが、節の目がピシャッと揃つた、長さは三十メートルぐらいあります竹穂垣です。この竹垣の裏側が随行の方々の宿泊室になっています。これがないと、向こうで見たくもないパジャマ姿を見るはめになるので、そういうためのスクリーンです。

主賓エリアの写真は公開できないのですが、主賓の日本におけるお住まいというのは、居間があつて食堂があつて、それからベッドルームがちゃんと二つあります。それに加えてこういう座敷をつくりました。この部屋に付属してちゃんと風呂もあれば脱衣室・化粧室という部屋もあります。まさに日本の旅館に泊まるようにこちらで日本の空間そのものを実体験していただけたらということで、プラスアルファでつくった部屋ですが、実はこの部屋がいちばんお金がかかっている。面積あたりがいちばん高い部屋になつております。この座敷の外側の庭がこういった庭で、いかにも京都といった、非常に自然写実的な風情のある庭がその東側に展開しております。

朝日はこの東側から差します。迎賓館というのは昼間はほとんどお客様はいません。たぶん市中の清水寺へ行こうかどこへ行こうかとか、どこぞでお茶をいただいてこようかとかやつていらつしやるわけで、夕方から次の日の朝、寝ているあいだは記憶がないですから、そこが勝負の建築なんです。明け方はこちら側から日が差してくる。ですから木漏れ日の朝日を感じて目覚めて、歯ブラシで歯を磨いてというふうなことをしていただける建築だと思います。

これがやさしい滝の部分です。こういった話は今日はプロが三人来てますから後ほどお話を聞いていただきたいと思います。仮組みはパラッといきます。このような十分の一のモデルをまずつくって、「だいたいこんなものかね」と【写真83】。この中央の石が先ほどの大滝のなかで考えていた石をイメージしたものです。こういった仮組みを、佐野さんのところの山で石を仮に組みました【写真84】。これは工期を短縮したいということ、現場でああだこうだ悩まないで、ここでもつてだいたいの方向性を決めてあとは移築していくということです。これは三谷さんですね。この帽子姿は佐野さんですね。原寸大で仮組みをして、それをこのように現地へ運び込んで組み上げました【写真85】。

先ほどのいちばん奥の滝のあたりです。まだ建築がこんな状態のときに庭を一生懸命つくっているのです【写真86、87】。普通はないことです。建築と同時に庭をつくった。大変ご苦労をかけたわけですが、その結果、三年で工事を終わることができました。

これも先ほどの大広間の庭の仮組みをしたときで、これは尼崎先生、これは三谷さんですね【写真88】。

佐野さんはいですか。

これは四国で大滝の石を組みました【写真89】。三百トンレッカーという巨大な重機が必要なわけで、四国で散々悩んで、それをこちらに持ってくる。この大きさです。こういった石が先ほどご覧になつていつたということです。

これはみなコート姿です【写真90】。これは佐野さんじゃないですか。寒そうにしていますね。これは夜です【写真26】。これで画像は終わりです。今日は三人のバトルが今から始まります。以上で私のほうは終わりまして、先生どうぞ。私は画像係で、あれを出せ、これを出せといつていただければ出しますので。

●尼崎　具体的なことはまたこれからどんどんと話が出ると思いますが、今見ていただいて、いくつか基本的なことだけ少しお話しておきたいと思います。一つは、やはり庭というのは自然ですね。しかも京都につけられた庭ということで、京都を代表とする日本の風土。それと同時に大切なのは歴史文化です。庭園と建築が一体となつた空間にそれらをどう表現しうるのかということが基本でした。

そういうなかで表現したかったのは「水の輪廻」、つまり大自然の輪廻なのですね。造形として、素材として大自然の輪廻への思いがどう込められているか、この点が注目してほしいところです。

その大自然の輪廻に人がどう関わつていったのか。大自然の輪廻と人の営みのそのダイナミズムというのをどうか、それをどう表現しうるのかということが二つ目です。

それから三番目は、今回の大きなテーマでありましたけれども、伝統的技能の活用です。今では忘れられつつある道具を伝統的技能とともに復活させる。それをさらに若い人たち、次世代に伝えていく。そういう重要な場であったと思います。その三点がまず最初に私が申しあげておきたいことです。

●佐野　皆さん、植木屋の佐野でございます。私は学者先生と設計者の先生とは違いまして非常にガラが悪うございますので、表現がちょっと荒っぽくなりますが、お許しをいただきたいと思います。まずもつてこういう仕事に関わさせていただいたことについて、皆さん方にお礼を申しあげたい。といいますのは、国の大好きな資産、皆様方の税金を使わせていただいてこういう後世に残る仕事に関わさせていただいた。これに非常に感謝しております。ありがとうございました。

仕事の中身といいますのは、ちょうど私が真ん中においておりますのをご理解いただきたいのですが、隣は学者で隣は設計の先生で、私が横におりますとどこへはみだすかわかりませんので、うまい具合に真ん中に挟ま

れて、いいたいことも半分ぐらいしかよういいませんが、ひとつよろしくお願ひいたします。

なにはともあれ、大きなお金を使わせていただきますので、まず無駄のないように、これは京都の独特の考え方で、そこにあるものをうまく使う。何でもないものを使いこなす。これがだいたい京都の独特のやり方です。あとでいろいろ話が出てくると思いますが、例えば先ほどの礫こぼしの細かい一寸か二寸ぐらゐの石まで、現場で発生したものを全部あの場所で使っています。大きな掘削がありましたので、普通の場合ですと残土として捨てられるのですが、ちょうどその工事中に行きましたときに、鴨川が暴れたときに堆積したもののがいっぱいあるんです。それとやはり歴史的な御所の中の場所、その中に鴨川が暴れたときの石が大量に出てきましたので、「これを捨てるとはやめといてくれ」と全部集積してふるいをかけまして、いちばん大きいのは一尺ぐらいから、いちばん下は一寸から二寸ぐらい、これらを全部使いこなしました。

その石がなぜこうなったのか。このときに尼崎先生にいろいろお知恵を拝借して、「先生、この石を使うんですが、この石はいつ頃できたものなんですか」と。流れてきたのはだいたい四百、五百年以前だと思うのです。石ができたのは、先生、あれはどういうふうにいつたらよろしいのですか。石の誕生は。

●尼崎 それは二億五千万年ほど前にできたものです。おじいちゃんも、そのおじいちゃんも、そのおじいちゃんも生まれていらない昔、京都が海の底であったときに堆積されてできた岩石がほとんどです。チャートとか、泥の塊の頁岩（けつがん）とか砂の堆積した砂岩とか、それら二億年以上前に海の底でできた石が隆起し、陸化したことによつてわれわれがそれと出会い、庭石として使つたというわけです。貴船の石なんかは、海底火山が爆発して噴き出した溶岩が固まつたものです。庭石を据えるというのは、そういう壮大な自然の輪廻に関わっているということで、それは大変な瞬間だということを話したわけです。

工事中に掘削された土に混じっていた石は鴨川の礫が堆積したもので、これも何万年レベルの話だし、本当に長い時間のなかでの一コマだということです。

●佐野 私は学がありませんので、こういうときには学者先生を利用するわけです。そういうものが出てきまして、それからお隣の三谷先生が基本設計を、これは国の仕事ですので間違いのないように基本設計をきちんとつくっていただきまして、いかに基本設計に忠実に仕上げていくかがわれわれの仕事なんです。ときどき思ひもよらないものがボンと出てきたりします。いわゆる使えるものがね。壁もそうですね。

●佐藤 土も使わせてもらいました。この場所はかつて公家屋敷の跡で埋蔵文化財調査をやりましたときに、四十立米というわずかなものですが京錆土というものが出来ました。その土をふるつて、先ほどご覧いただい和室の壁にそれを上塗りとして使っていきます。だいたい半分使いました。ちょっと首相官邸へ行つて、あとは京都にあります。

●佐野 そういうことで非常に長い歴史といいますか、考えもつかない、二億五千万年前からの話がここにできあがっているわけです。先ほどいいましたように基本設計のなかで忠実に仕上げていくなかで、とても私一人でできるものではございません。やはりそれそこなしてくれる人がいります。とくにお互いに三谷さんを困らせた。私も八十近いので、三谷さんは五十なんぼでしたか。次の世代をやってもらわなかんので、ちょっとといじめてやれど。家でいうとお母ちゃんに怒られますので、よそにあたるわけです。
そうしながら今度は若い人に言葉の遊びを。京都のわれわれ業界独特の言葉がありますので。これをうつ

かりいいますと、今はすぐにセクハラとか何とかいわれるのです。それがいえなくなつてから仕事がやりにくくなりましてね。この現場では昔のままの尺貫法で進めていっています。いわゆる尺と間でやつていかなこと、俗にいう言葉の遊びで「間尺が合わん」というのです。寸法が合わんということです。こちらの設計の先生は現代の人ですので、何センチという話が出るんです。一センチといいますと一センチしか動きません。ちょっととというたらその人の感覚で都合のいいところへいくんですわ。「センチは朝一回にしておいてくれ」と、これも言葉の遊びなんです。

そういうことをいいまして、私を補佐してくれましたが、そこにいる植芳の今の社長です。私から見れば名前で「こら、おまえこれせい」と呼ぶような、そういう世界で非常に荒っぽいやりとりをしながらですが、先ほどからお話をありますように、佐藤さんに建築の間取り、柱、それから障子はどうちへ引くのか、両引きなのか片引きなのか、袋に入るのか、そういうことでいろいろ建築の方にもご迷惑をかけました。

それから現場ではとにかく皆さん方に、私は逆らうのが大好きでね。これも先ほどいったように家で逆らうと怒られますので、逆らい倒したから心配してこんな頭になつたんですね（笑い）。これからちゃんと生えると思いますので。そういうやりとりをしながら何とかいいものをつくるうと。お金というのはあとから評価してもらつたらいいやないかと。できたものについて評価してもらつてお金をいただこうと。そういうことで私はお金のことは一切わかりません。

ただし、ではどこから次の、今でいうヒントというのですか、それをどこからつかもうかと。これはやはり女性からなんです。女性のまず服装、きものを見た場合、やはり色、歩き方ですね。和の部分は着物の裾さばきですね。そういうところで女性の色気をどこで出すのか。庭にも色気を出さんとあきませんので。この人はかたいから色気が出にくいんです。眞面目が過ぎて。そういうことでケンカばかりで。今の植芳の社

長に「おまえちよつとケンカしてこい」と。やはりケンカをしながらでないといいものができません。いろいろ困らせたことがいっぱいありますので、お困りになられたことをひとつご披露いただきます。

●三谷 私がやったことというと、石から落ちたことぐらいですかね。先ほど映つておりました大きい四十八トンの石の仮組みをやっているときに、石の上から転落いたしました。下に既に据えてありました小豆島のザラザラのヤスリのような石、写真のいちばん左側にある石なのですが、その上に落ちまして、しばらくびっこをひいていたことがあったのですが、そういう痛みを佐野さんは与えてくださいました。

それから余談になりますが、現場の大自然の輪廻という話、あるいは自然と人の営みとの関わりみたいな話ですけれども、もともと私は生まれたのは大阪ですが、若い頃に京都に少しいたことがありますて、それから約十七年間アメリカの東海岸・西海岸でランドスケープの仕事をしております。日建設設計という設計の総合事務所に入つて再び京都に戻りこの仕事に関わることになったのが約八年前です。そういう意味でも非常に人の輪廻といいますか、めぐり合わせといいますか、そういうものを感じます。

現場を掘削したときに出でまいりました砂利のレイヤーの中から仏さんが一つ出てきました。城陽のほうの土捨て場に一旦掘削した土を持っていって向こうでふるい分けるのですが、ふるい分けた砂利が山になつているその中に、私はひょっとしたら北白川あたりから何か流れてきていて、庭で使えそうな石がないかなと見てみると、花崗岩系の石がありまして、実際にそれを起こして見てみると、仏さんといいますかお地蔵さんみたいなものだったのです。

それを見つけて、しばらくはその砂利の山からよけて少し離れたところに置いていたのですが、夜になると「私を地面から掘り出しておいて、あんたはどうする気や」と夢に出てくるのです。そういう夢を何度も

何度も見るうちに先に離しました巨石の上から落ちるということがありまして、「これはあの仏さんを何とかせなあかんな」ということで、佐野さんに相談して、大徳寺のほうに知り合いの房がありますので、そちらのお坊さんにお願いして魂を抜いていただいて、大徳寺の裏の無縁仏が置いてあるところに今はいらっしゃいます。いろいろなことが形をつくるということにはあるのだなという、そういう感慨にふけりながら先ほど写真を見ておりました。

庭の構成には、自然風景を映したようなリリカルな部分と、それとは逆に、これで見ていただいているような感じの、抽象的にしている部分と、両方がうまく混ざっていると思います。いずれにいたしましても人と自然の関わり、あるいは大自然の輪廻と人の営みの関係のなかで、昔実際に使われていたものにもう一度命を与えるおすといいますか、そういうものが一つの庭をつくるときのテーマになっていたのかなと、今考えれば思います。

浅い池の風景ですが、緑の垂直線みたいなもの、どちらかというと田植えの浅い泥田に植えているような感じの風景をうんと凝縮しながら、わざと玄関を入れて最初に目に入る庭のところに創りながら、アジアといいますか日本といいますか、そういう雰囲気で美しい部分を切り取って抽象的に表現しています。

●尼崎　田園の風景をイメージさせるということですが、私たちが庭園との繋がりでいろいろイメージする自然というのは、人の手が加わった自然なのです。それを二次的自然といいますけれど、アカマツ林もそうです。京都は昭和九年の室戸台風で東山の木が全部やられて、桂離宮も松琴亭付近の風道にあたったところの木は全部なぎ倒されてしまいました。そのとき早期緑化のために植えた木が現在の樹林を形成しているわけです。東山もシイとかを早期緑化で相当植えました。もとはアカマツだったんですね。人と自然との関わ

りのなかから生まれてきた二次的自然としてのアカマツ、そのアカマツをああしてたくさん使っていきますのは、人と自然の営みの一つのプロセスの表現でもあるのです。

人と自然のさらに濃密な関わりのなかから生まれた水田もそうです。もっと生活に密着した二次的自然といえます。あそこにポツと立っている五条大橋の橋脚にしても、人と石という自然素材との関わりの中から生み出されたものです。そういう素材を抽象的に、あるいは風景的に、二次的自然の風景とうまく融合させている。台杉もそうですが、まさに生活デザインなのですね。そういう微妙なニュアンスも読み取っていただけたらと思います。

●三谷 台杉も結構古い台杉です。佐野さんのお父さんが植えられたものと言う事ですか。

●佐野 そうですね。

●三谷 値段があつてないようなものなんですね。

●佐野 いや、ありますで。

●三谷 たぶん昔の五円ぐらいだから、今だったら十円だろうと私は思うのですけれど、そんなことはないですか。

●佐野 いろいろ今お話を出ていましたけれども、もういつぺん橋杭の写真を出してもらえますか。これはわれわれの経験と、年寄りからいろいろと話を聞いてきたことですが、俗に五条の橋というと皆さん方は今の五条大橋を連想されますが、あの五条の橋は昭和になつてからで、それ以前は松原橋が五条の橋だったといわれています。これは六百年以上前の橋脚です。それがその次の五条の橋です。京都の方はほとんど覚えておられると思いますが、先ほど尼崎先生がいわれた昭和九年の室戸台風の翌年の昭和十年、このとき大雨と洪水で鴨川が氾濫したんです。そのときに、あの上に木の橋が架かっていて、下は頑丈なのですが上は木橋なので全部流れ、それからコンクリートとか鉄筋に替わっていきましたので、京都の人には「もつたいない、もつたいない」といって何でも取り込んでおく癖がありますので、たまたまそういうときに、植芳の剛宏のおじいさんかおやつさんが畠の隅へ置いておいたんです。

この庭をつくっていく過程で三谷さんといろいろ相談しながら、やはり大広間はくつろぎの場所ですのであまりやわらかすぎると俗にいうすぼけになるし、何かないかといったら、「うちにこんなあるで」「あつたら持つてこいや」となったのです。それで無理やり持つてきまして、これがちょうど四百年ぐらい前のものです。京都にはそういう歴史のなかでそのときにいらなくなつたものをまた次の世代へ、何年かの間に全部こうして生き返させていく、独特的のやり方があります。両方とも石は白川石です。先ほどの石仏も白川石です。これがあそこへ流れついていたのは、やはり四百、五百年ぐらい前に大水で、比較的あれは浅いところから出でてきていますので、それだけ鴨川が氾濫していたということです。

そういういろいろな歴史を踏まえながら、では元の京都の姿を使おうではないかということで、設計者の三谷さんのご理解を得て、もうひとつうるさい佐藤さんのご理解を得て、それから何とか剛宏と二人で相談しながら、両方を怒らせもって、好きなことをやらせてもらつて、皆さん方の税金を使わせていただいた。

そういうことでいろいろありがとうございましたということです。

●尼崎 今、橋脚の話と洪水の話が出ましたが、三条大橋と五条大橋の橋脚は明治十年代に付け替えられました。そのとき、天正十七年の古い橋脚は今の京都御苑の東南の隅、今はテニスコートがあるところ、あそこに山積みにされていたのです。私はまだ生まれておりませんけれど、見てきたようなことをいいます。それを「あんなところに積んでいてもったいないやないか。それを使わせてよ」といったのが小川治兵衛なんですね。小川治兵衛さんは明治二十八年に平安神宮の、今でいえば中神苑と西神苑をつくるのですが、そのとき天下申請をして臥龍橋という、ああいう斬新なデザインを生み出したのです。そのように橋脚とか古いものを捨てないで使う、それをうまくデザインしていくという歴史がずっと京都にあるのだということを補足させていただきます。

●佐野 さすが学者先生ですね。

●三谷 京都を代表する尼崎先生と佐野大先生のご協力で庭ができあがってまいりましたけれど、庭のなかで底支えするといいますか、庭工事とはべつに、竹垣工事・竹工芸、それと石工芸と、庭園にからんだ伝統的技能工事は三本立てにしておりまして、随員のパジャマ姿を見たくないがための竹垣でござりますけれども、竹垣の工事を担当された中川さんがお見えになつてるのでそのあたりの話もしたいと思います。

もともと建築の佐藤さんのほうで考えていた前庭の部分は、花崗岩の石畳で水平性をという話がありますが、あそこに私は竹垣を本当は使いたかったのです。竹垣のなかでも私の好みはクロモジの垣であります。

クロモジ垣を、玄関を出た真正面のところにドーンとは是非しつらえたいと思つておりましたが、なかなか各方面の抵抗勢力が強うございまして、それはあきらめました。そして、随員の宿舎のところに竹屋さんのほうで執念を込めてやつていただいて竹穂垣ができました。この裏側にクロモジが使つてあります。すごい出来映えで、「さすが、京都」と皆さん感心される部分であります。

ほかにも石屋さんの北白川の西村さんに、いろいろな石の加工に関しまして精緻な、まさに「石大工」というにふさわしい噛み合わせの仕事を石橋等でやっていただきました。コイの餌やり石は、今は船着場という名前で呼ばれておりますが、この「石」の裏あたりの仕事に關しても、ぜひ佐野さん、組み上げにあたつてすごい仕事をされているわけですが、ちょっと話をお願ひします。

●佐野 ちょっとわかりにくいのですが、平面でいくとわかるのですけれど、いちばん三谷さんのお好みの大きい前の石があります。あれもいろいろ気を使われまして、外国の方の女性のハイヒールが、表面がでこぼこしていると非常に危険というので、できるだけ表面のツルッとしたやつをと。これは約二十トン近くあるのですが、今は表面が七寸までぐらりしか出ておりません。ほとんど下に入っています。その繋ぎのあいだの石も尺の三間ぐらいのいろいろな面白い石を三谷さんが見つけられまして、それを組めということでした。

向こうに二本、樋門のように立っているのは【写真79】、これも四国の中田の塙門に使つていた石をうまく利用したのですが、この底を切りまして、浮かさないといけませんので、それを下駄の歯のようにはめ込んでいきます。このときにはやはりセンチではできません。この時代にもうすでに尺貫で、尺角とか、尺の七寸とか尺八、いわゆる尺八寸、そういうものが決まっておりますので、それにうまく下駄を履かせました。

高下駄式になつてゐるのですが、これをはめ込むのに中へ潜り込んで、その上から約二十トンぐらいの石を落とす。中に人間が二人ほど入つてゐるんです。ひとつ失敗したらグチャッと潰れるんです。どうしてもそうしないとできません。そこで昔の工法を思い出させたのがこの現場です。箱ジャッキといまして昔からありますぶさいくなジャッキなんですが、使い方によつてはどうにでもなる。それといわゆるダルマのジャッキです。これは皆さん方が車のパンクなどで使われますね。そういう古いものをみな引っ張り出しました。

ときには棧橋を組んだり、いわゆる中受け、中で受けながら両方へ力を逃がしながら、じわじわじわじわ降ろして。それを全部ほどで留めていきます。そのほどを合わせるのが非常に難しい。そのあいだ両端に二人ほど人間が潜り込んでいまして、上から蓋をしていくのでさっぱり出られないようになつてくるのです。「昔は工事が終わつたら生贋があつたんやから、おまえらもそのつもりでおれ。ずっと迎賓館におれる。生きているあいだは餌を運んだるわい」といしながら、そのぐらいの根性で何とかできあがつたわけです。

それを斜交いになつてみんなで引っ張り出すのです。引っ張り出すんですが、やはり痛いんです。「おまえは痛いかしらんけど、俺は痛くないから引っ張つた」というんです。そのぐらいの難しいこともやりましたので、できあがりは非常に幾何学的なところと理屈に合つた、そういう面白い仕事もやらせていただきました。

●佐藤 今、佐野さんがおっしゃつたのは実はこの石です。高下駄のように水の中に浮いてゐるのですね。この下をコイがヒヨロヒヨロと通り抜けて向こうへ行くことができます。そういうやばい仕事がこういうところにあります。

●佐野 コイは下の水を泳いでいるんですが、非常に狭いところがありますので、こちら側に「大型通行禁止」と書いています。

●佐藤 次は何を出しましょうか。

●佐野 大広間の刈り込みを。なぜドウダンかと。

●尼崎 これですね。ドウダンです【写真21】。三月でまだ葉っぱを落としている時期です。初めはあそこに常緑で直線の生け垣を設けて、向こうの建築との結界にしようという設計だったのですが、「それはやめないか」といつて、設計者が「え？」とびっくりしたのですけれど。これを見たらわかりますように、建築のラインがスカッと幾何学的に通っていて、あいだには水面が介在している。そこにまた直線を入れて、しかも目隠しをしてしまう、非常に煩雑になると、水面の存在をどう感じさせられるのか、そういう論議の結果ですね。

あそこはスポーツと抜けていますけれど、そこから水面の広がりを予感させるとともに、自然な曲線で收めることによって、全体のやわらかさと繋がりを出そうと考えて、「とにかくドウダンでいこう」と、三谷さんがいないうきにやつちやつたりしてね。「井上さん、どうですか。やっぱりこっちのほうがいいね」と言って。理詰めでやつても決着がつかないことははつきりしていますので、いいと思ったらとにかくやってみて、それでどうだという新しい論議をしていく。そういう結構自由なやり方で仕事をしていったわけです。

基本的には設計があつてするのですが、現場からの発想は日本庭園の伝統なのです。平安時代にすでに

『作庭記』という最古の作庭書ができるまで、それがずっと古典として読み継がれてきているのですが、庭作りの技術的なこともさることながら、基本的な心がまえを説いてあるから古典となつたのです。あまり詳しいことは申しませんけれど、たとえば「よりくるところに従いて」とか「乞わんに従いて」という言葉があります。庭作りの場にいると、自然と「こんなふうに収めていきましょうよ」とその空間が教えてくれるというのです。それが「よりくるところに従いて」です。それから「乞わんに従いて」というのは、素材自身が、「こうしてよ」と語りかけてくるのです。「あつそうか、それならそうしよう」というふうにして庭はできていくものだということです。

ですから現場での感覚というのがものすごく重要だということで、設計図になくても現場で「よりくるところに従って、こうしちゃおうよ」と、そういうことも平気でやっていったというのが結局よかつたんですね、佐野さん。

●佐野 今、先生にお話いただいたのですが、その前に佐藤さんと三谷さんとも意見が合わないというお話が出たわけです。といいますのは、やはり好み、それから自分はどうしたいか、日建設計の社内同士でも意見が合わないので他人が来たらもうひとつ合わんのはわかりますやろ。それの連続でね。私が妙なことをいつていたというのは、悩んで寝られないのは前向きやと。悩んでいるのやから前向きですわ。腹が立つて寝られへんやつはどうしようもない。皆さん方、腹を立てたらあきませんで。悩むやつはまだ前に進むんですわ。それの繰り返しです。

先ほど佐藤さんから話が出ましたように、ちょうど二メートルの落差があるのです。あそこを一覧になつた方はそれをお気づきにならなかつたと思うのです。常に池に水が入っていますので、水を使う場合には非

常に楽な場合と恐い場合がある。水はいつも水平ですので、基準がとりやすい。ただし、一つ間違うとどんなことになります。この水の使い方は佐藤さんが非常に苦労されて、「なんでそんなことせんなんのや」とだいぶん佐藤さんに食つてかかりました。

といいますのは、先ほど夜の世界のこと、夜景のことをいわれましたが、私は日が暮れたら寝ますので夜のことはさっぱりわかんで、「朝の話にしようや」というようなことを。

●佐藤 大嘘ついたらあきませんで。

●佐野 ちょっとぐらい真面目な話もさせてくれや。常にそういう冗談のなかから何かを引っ張り出す。そういうことをしながら若い連中を引っ張つていきませんと、疲れてしましますので。

ちょっと余談になりますが、今の若い人、皆さん方のご家庭もそうだと思うのですが、今の生活はほとんど終わりに近いところか途中からものが始まるのです。人間がしなくてよくなつてきた。そのいちばん端的なのが風呂です。今の子どもは、風呂というのが水から始まることを知らんわけです。風呂は湯が出るところだと思っている。あれは水から始まるのです。今の若い人は現場へ来ても、「これをやれ」というとやるのですが、それをやるにはどういうところから手をつけていいたらいいかということをわからずにボツとやるもんだから、ガタツとケガをしたり、そういうことだけが心配で、との現場でのことは、ときどき困つたら尼崎先生に何とかいいながら、三谷さんを何とか納得させよう、へこませたろう、そんなことばかり。それと若い者をいかに疲れないように仕事がやりやすいように、それがいちばん心配なところでした。今とくにやりにくくなりましたのは、一服ができないんです。こういうものづくりをされている方はどう思わ

れるかしりませんが、昔は一服があつたんです。今は休憩になるんです。休憩といいますと、流れがブツツと切れるんです。そしてまた始まりは一からやつていかなあきません。一服というのはその場で腰を降ろして、タバコを吸う吸わんは別にして、そこでいろいろ前後を振り返りもつて次の段取りをするのですが、どうしても休憩というと限られた別の場所でやりますので、段取りがつかなくなる。それがいちばん困ったようなことです。

あとは本当をいえば、剛宏（植芳社長）をこの上に引っ張りあげて、いいたいことをいさせて、三谷さんとケンカさせたらもつとおもろいのやけど。ここはちょうど能舞台で暴れるところやから、一人で暴れさすのもこれも仕事の一つなんですね。そういう緩と急、静と動、そういうものの全部噛み合わせなのです。歯でも噛み合わせが悪いとうまくいきません。そういうことで、もつともつと本当に困ったお話を三谷さんどうぞ。

●三谷 なぜかまたぶられてしまいましたが。とはいって、国の仕事でございまして、締めるところは締めざるをえないというところもありました。今となれば本当に、こういうふうにくにたらしい佐野さんとか、かわいげがない井上さんとか、天使のような尼崎先生とか、いろいろと議論を本当によくしたなと思います。大広間の前というのは、皆さんのがいちばん知恵を出し尽くした部分ではなかろうかと思います。例えば水との関わりで、水鉢を置くかどうかという話もありましたね。ドウダンツツジのことでは、私は性格的に真っ直ぐなものですから、こういうぐいやぐいやした線はあまり好みではなかったのですけれど、やってみれば、「なかなかこれもいけるじゃないか。さすが尼崎先生」という感じでした。一つの解き方ですね。

例えばこの写真に関していえば【写真81】、実際にはここにガラスが入っていて外には出られないのです

が、五十六畳の座敷がありまして、座敷の庭でござりますので、沓脱ぎふうの物を置いて「目が歩く装置」といいますか、そういうものを据えています。これも四国の塩田に使われていたもので、ここに軸受けの穴が空いておりまして、その周りに五つのボルトをモルタルで留める穴があります。今日お見えになつているかどうかわかりませんが、これを北白川の西村さんにちょっと叩き直してもらつて、梅鉢の模様になるように、梅模様が千鳥で入っているようなしつらいにしています。

これも同じく塩田系の残石の再利用です。きれいなほどが空いていまして、ここに差し込んで組み上げていたものだろうと思います。こういうところに溜まる水と、例え手水鉢に溜まる水を比べると、個人的には、人が何も考えずに、たぶん用のために膨ったところに溜まる水のほうが、手水鉢という水を溜めるためにつくりあげたものに溜まる水よりも、水としてのリアリティがあるなと思うのです。例えばここに手水鉢を据えようとかという話をして、出たり入りたり向きが変わつて右を向いたり左を向いたり、出船にするか入船にするかとかという話を何ヵ月ぐらいやっていましたかね。

かなりいろいろとやり変えた末に、最終的に削除できるものは削除してしまつて骨だけになつたというところです。基本的にはいろいろなものをプラスして、ちょっとここにあれをとか、そこにあれをという形の追加型の庭のつくり方というのを一般的にはやられるのかなと思いますが、基本的には一旦それを入れて、それをもう一度はずすというなかで、最小限、庭の構成のために必要なものだけ入れようという私の考え方です。このあたりの話は、佐野さんとか井上（植芳社長）さんとも言葉では基本的には合意ができていた部分のはずですが、どうしてもこれがミニマムだと思う線が、好みもありましてかなり違う部分もあつたかもしれないなど、今は思つたりしています。

いずれにしましても、庭をつくるというよりも、私はいちばん最初に京都の庭師の方々にお願いしたので

すけれども「フルスケールの風景をつくる」と。庭をつくるのではなくて風景をつくりましょ、風景をつくって周りの緑を取り入れるような形の、御苑の緑を引き込むような、味方にするような、そういう庭にしましようという話を、かなり最初の段階でしていた記憶があります。

御苑の風景もまるっきりの大自然ではなくて、尼崎先生がおっしゃった中自然といいますか、人の手の入った自然で美しいもの、赤松もそうですし、竹もそうですし、台杉という京都ならではのもので林もつくってありますし、ちょうどコイの餌やり石といいますかお立ち台のようなところで、エリザベス女王がコイに餌をやっているところをこのあたりからカメラで撮影したとき、この奥にちょうど台杉が植えられておりまして、その映像を見ればすぐに京都発信というのがわかるような、そういう庭の構成にしたい思っておりました。

皆さんは簡単にご覧になれないような状況でござりますけれども、京都の文化を発信する場所ということです、海外の方もこれからますます来られるような形になりまして、庭というもの、あるいは環境デザイン、あるいは伝統的な技能というものがますます世界に向けて発信されるとそれは素晴らしいということですね。

●佐藤 建築と違つて庭は実にいい。建築というのは図面を描いて、施工図が描かれてきてハンコを押したらもうおしまい。そこで勝負あつたで、修正なんかできないのですよ。庭はいいですよ。つくつてしまつて、あとから「それを右へ持つていけ、左へ持つていけ」と。こういう性格だからそういう仕事を選ばれたのだと思いますが、建築をやっている側からすると羨ましいかぎりであります。

三谷さんの今の発言は、この屋根の上に見える緑というのは全部借り物なのですね。京都御苑の中のものです。それを借りて、例えはこの屋根の上は京都御苑の緑です。ですから敷地の中を割つたり切つたり、こ

のへんなどは非常に希薄なんだけれども、逆にこれが薄いがゆえにこの奥の緑が庭園の緑として引き込まれてくるということを彼はいいたかったのであります。

●尼崎 時間がありませんけれど、職人さんのいい仕事をちょっと見ていただきます。いちばん奥の軒内の叢こぼしのところですが、これは一人の職人さんが、敷地から掘り出した石の中から適した石を一つずつ選び出して、選び出すところから張るところまで、本当に素晴らしい仕事をしていただけたと思います。これだけで八ヶ月かかったのです。一日にできる仕事は尺角、三十センチ四方です。八ヶ月間かかって一人の職人さんが完成させたのです。写真では想像がつかないぐらい見事な仕事です。こういう仕事が随所に散りばめられているということをぜひ感じとっていただきたいと思います。

先ほどの佐野さんが、若い人のいろいろなことをおっしゃいましたが、現場は最初すさまじかった、佐野さんの怒鳴り声で。「こんなうるさい現場知らんわ」と思っていました。ところが不思議なものですね。日が経つにしたがって怒鳴っている内容が違つてくるし、頻度もずっと落ちて、息の合った気合の漲る現場に変わっていった。若い人は大変な勉強をしたということですね。本当に短期間で。きっとこの現場を糧にして次の時代をつくってくれる、そういう若い人が育ったように思います。これは私の感想です。先ほど悩みの話がありましたね。悩んで夜寝られないのはどうとか。

●佐野 悩むのは前向きなんです。腹立つやつはどうにもならん。

●尼崎 悩んで眠れなかつた人はいっぱいいたと思うのですが、佐野さんが完成間際に眠れなかつたという

話をちらつと聞いたりしたのですけれど。

●佐藤 夜中に唸っていた。

●尼崎 この佐野さんにして、それほど重い仕事というか、世紀の大仕事だったのだなということを強く感じました。

●佐野 先生は何のためにこんなことをいわれるのかちょっとわからんのですが、苦小牧高校やつたら私はもっと早くにクビになってしまいますね。といいますのは、やはり今の子は甘いんです。私はそう思います。やり方にもいろいろありますけど。怒鳴るというのは、一つはやはり勢いをどうつけていくのか。怒鳴ったからにはやはりその結果を出さないかん。その頻度が落ちてきたというのは、もうくたびれてきただけのことですわ。

夜は、これは家内がいまだにぼやきよるんです。夜中に急に「ワーッ」と唸ったり「バカモーン」といつたり、それなのに一度もあそこ見せてもらへんのはどうなってんねんといまだにぼやかれています。そういうことがいろいろありましたけれど、これも冒頭に申しましたように皆様方のサポートがあればこそなんです。

私はラグビーはわかりませんが、サポート、サポートって何やったんやなと思ったら、皆様方の目に見えない後押し、これをいただいたから京都にああいうものを残せたと、これには非常に感謝申しあげております。今後もまた何か御縁がありましたら、いろいろと皆様方にサポートいただいて、私も白木の長持までも

うなんばもないと思ひます。そのあいだやんちやし続けようと思ひますので、どこかで出会つても知らん顔していただきますようにひとつお願ひいたします。

●佐藤　さすが長老。いい年ですからね。質問の時間をとと思いましたが、ちょうど計ったようにお話をまとめていただきましたので、このへんでお開きにしたいと思ひます。